

常山紀談

廿五

135  
15  
116

東 京 圖 書 館			
一 五 冊	二 六 一 號	五 二 架	三 五 函
雜 史 類			和 書 門

常山紀談卷之二十三目次

- 一 直江山城守閻魔王の書を贈り訴訟人を斬る事
- 一 安藤直治紀州打の刀を成瀬正成に贈られし事
- 一 土屋數直執政の事并土屋忠直成立の事
- 一 塚原卜傳劍術鍛煉の事
- 一 東照宮松倉市橋堀米山別所五人へ御遺言の事
- 一 鮭延越前組下り慈愛ありし事
- 一 烏丸光廣卿行状の事
- 一 中院通村公江戸より和哥を詠給ひし事
- 一 本多忠義書籍評論の事
- 一 義経の鞍の事

- 一 根來法師賞功の定并大澤仁右衛門ノ事
- 一 大音左馬助先登を論ぶ事
- 一 永田治兵衛功名の事 附 極井合戦の事
- 一 於萬の方塙圍右衛門を扶持せしむ事
- 一 奥平家の士は妻髪を切らざる事
- 一 優婆塞お馬の事 附 信玄馬を擇む事
- 一 森寺藤左衛門池田家興立の事并森寺政右衛門武勇の事
- 一 伴玄礼殉死を止る事
- 一 一番大膳二條城へ使ふ参る事

常山紀談卷之二十三

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

上杉家か 寶寺何某とのふ者下部の罪有る誅せしを其一族  
 大に怒り死しる人を帰し給はれと直江山城守不訟へて其  
 下部會葬死す及ぶ事ふや有とん直江白銀二十枚あてて  
 跡をとへてなまめとせども愈用ひ金是非不帰し給はれと直  
 江を催使し一より直江へ歸ぐはれどもとかく聞入ら其時直  
 江ありらば訟の如くせんとて一族三人捕へさせ地獄へ行て迎へ  
 来せとて書簡一通封トて使子往けしを首を刎りて其書  
 簡おまわりの子細候て三人迎ひに参らせ候とて帰しきまひ  
 候へ慶長二年二月七日間魔王冥官披露直江山城守兼續とて書りたり

○安藤帶刀の子を飛騨守直治と云ふ成瀬隼人正正成或時直治  
 子紀州よりきたりて刀を乞得て後成瀬彼刀の事を語り  
 と尾張より死罪人の有るを試みてはあつた切せり能  
 出来たる残多し又きない直ませ給へ候へども安藤安事な  
 り紀州より心よく切せりたや一き事よりのいふ成瀬打笑  
 ひ紀州より心よく切せり尾州より然らざるハ尾張の人骨堅  
 き故ぞとたふされし安藤聞ゆるあつた尾張の士の腕  
 の弱き故あり銘刀よりも紀州よりよき候と答へり  
 土屋但馬守直執政たり一時金座の者ども相らうりて金銀  
 を入てふきかへり日本國の金甚多くなるといふ金の色は損  
 るの事莫大の利ありども但馬守用はれ但馬守は聞入られ此

○事行つるごとくいづれを數直に申す人あり鬼角の答なくと打過  
 られし又人をし問せし但馬守是ハ邪ありと云ふ金を以て  
 天下の寶と云ふ純物あるが故あり其寶を悪くせんと思ひし  
 事ありと云ふとぞ數直大猷院殿の近習仕へ申されし比又有て  
 答を蒙り引籠りありし大猷院殿上京まゝと云ふ數直密  
 にお上京せしを親族家人相止めし間入者京にお着てか  
 ちある所におかき居たり或時あるの事を數直におまゝに  
 と仰出させしは皆駭き數直ハ江戸におありつふと申せし聞  
 一召尋ねて見よ居る事ハあつたと仰せしと云ふ事  
 が一も小東の京におかきありしを頻々召出し仰せし汝  
 こも來てたき來らばハちりあんやと命ぜりし事どもあり

泰平の時とくとも千里の行程なれど事たりと思ひて後の  
 咎を顧み忍びて上京ありしに必すかくあるんごまろく明  
 智の遠慮君臣水魚の過季世子有がたまのあり此教直ハ甲  
 州武田家の士大将土屋宗藏昌恒が孫あり勝頼亡し時宗藏の子の  
 二才ふありしを駿河の富士の裾野の寺に土屋が相知る僧有る隠し  
 育たり東照宮御狩の時彼寺に立すせ給ひし御茶をまげ出  
 せしを此子が得てせしむ唯者ふあらず父ハ何者ぞと御尋あり住持  
 の僧氏あり者あり候と申し申されし再三詰り給へば御敵を  
 たる者の末より候隠し頼すまあまき不存トひまに育る候と謹  
 く申とて出家せんよりハ我不得さやよと仰せありてま今ハは  
 りとありたりなんと思ひて武田勝頼が供へて天目山子

死しより土屋宗藏の妾腹の子なり候と申しとて義士の  
 子なりとよ眼ざりのなり候と思ひて果しとてかたじけなく  
 とく召具せられ後民部少輔忠直とくひハ此人あり教直ハ忠直の  
 次男あり

塚原ト傳ハ常州塚原の人あり父を新左衛門とてト傳劍術  
 を飯篠長意に誓古一伊勢の國司に仕へ劍術を以て名を得  
 光源院殿の師たり其後上野の上泉伊勢守とて劍術者あり  
 上泉ハ新蔭ト傳まじ上泉も學びたりト傳が弟子の中ハ勝  
 流の妙手たりト傳まじ上泉も學びたりト傳が弟子の中ハ勝  
 る者ふ一の太刀は極意を授くべしと人も思ひてふ彼弟子或  
 時道のかかりつあがたる馬の後を通りてふ彼馬をぬりし  
 ひらりと飛のきく身の中らば見し人さけけふ塚原が弟子の中

中も勝きたるもといひし違はげともめくト傳ふ語をもト傳大  
 ぶ驚きくさくさといひし太刀さぐくべき器ふあぐげといひたり諸人此  
 事を不審しく試よとく類あきまね馬を道のかへつたつてト  
 傳を招くかきつらよのくれえ見居たりト傳馬の後を除き通り  
 せ馬をたんとせせ人々さうりしふふんれば後あかへと語りて彼  
 弟子の早きさをあめ給はぬ如何とらひしきバト傳聞くふんばや馬  
 のちめくも飛のききたるはさぞハ利さうも似たれども馬ハたぬもめと  
 りふ事をよすれさうと通りハあさうなり飛のきさるハ仕合と  
 いふものあり劍術の時より下手さくも仕合よく勝事あつた  
 それハ勝しうとも上手さハいさくげ只先をよすれま機をぬぬきよ  
 しとくさうり一の太刀は位ふ及ぶ事違ふとバ譽さうきと答

へーとぞ

○

東照宮御病氣重きふ及く台徳院殿もかきつらふあつたまた純帳  
 のきつら松倉豊後守重正市橋下総守正総堀丹後守直倚兼山左  
 馬助別所孫三郎を召き此五人忠ある者あり且大坂大和口ゆく武  
 功ありきく將軍仕へ奉きと仰らせしる皆涙を流ししと只ふ  
 くの詞ありたりも時又別所ハ祿少とれども此後取らけ忠ある  
 づきものあり大和口ゆくまきしき言をいひたりと仰らせしる別所泣  
 沈むくたり此ハ大和口ゆく城兵引返す法を追討せりし時別所諸  
 大将の前日馬を乗廻り先年筑紫さく嶋津が退口を尾藤  
 が慕はざりしを大悶怒らせ只今追かくべき圖をまがれ事無念あ  
 りわく申し孫三郎ハ馬一匹ゆ名齒をかかきりたりりふ人々わくま

腰のゆりしふやと大音は呼ぶ此事を聞し召ての事なりを  
 雖延越前ハ最上義光の長臣祿一万五千石あり最上の家亡後  
 流落ししふふあり家人ハ慈愛深き人なり士二十人  
 附従ひ各乞食し養ひんとし土井大炊頭利勝五千石與ひ  
 其バ二十人の士は五千石皆あてて各二百五十石あり其身ハ二  
 十人のもふ一日がたり養ひ終り一生を終り越前死す  
 二十人の士大ハ愁傷し一字を建立也今下総の古河城下  
 の 鮭延寺にあり

鳥丸光廣卿ハ常の居間ハ書物を繕きあへ四枚のみすま二  
 枚ありし脚ハ硯ありし三本入の扇子箱ハ筆あり其間ハ年  
 月経ても人の入事なし故ハ座しあへり其外ハ塵満

なり公宴参内の時も扇子箱ハ硯石を入き手ハ乗輿ハ入ら  
 ざる此卿江戸ハ召まき三年かゝり高倉屋敷かゝり歸  
 京あるべき間を小兼之座敷の前ハ庫有しを留守ハ  
 ありし雜掌ハハ公久し江戸ハありし廣き所  
 小な給ひ歸京の後此庫目前ありし物積りし其物ハ書  
 物なり庫ハ数十年諸家より贈りし物を積りし其物ハ書  
 院ハなく詳ハ書記し家人ハ分ち與へりかくと光廣卿歸京有  
 程経し庫の事ハ出されし雜掌庭のニあり異ありし  
 一ハども廣くなり庫ハありしやと問ましハありし  
 と申し内の寶物ハありしと有しハ皆くあり與へし候と申し  
 それハ誠ハありし汝ハ何を得意やと問ましハ一種ハあり

とくは無調法の事りめと打笑ひくそりあひめどしきうりしを君  
臣詳理を好まれし故ありとりや

大猷院殿の御時中院内府通村公御不審の事ありと江戸南光  
坊ふとがらりて三年たちしきしるが秋月を見と

ゆくかたし身を入さそもく夜ふくの袖は露とふむしし一月

と詠せしれしを僧正感吟お堪せしと大猷院殿に申されしは

三年の逗留旅情さぞあらん今八帰京候へと仰出さきと内府京

都小歸られし

本多能登守忠義或時近習の人小近きと世よめてとやけ書の

事を問ひし小平家物語評判の事を申者ありそれハ誰が著

したるうやと問ふ由井正雪が作候と答ふ忠義凡書藉ハ賢人

君子の著と處あるやえりしとて崇む事ハあれ正雪ハ大悪逆の

賊ありしと正しき事ハありト其書藉聞も穢ししと覺人き

以て言をすくばとふ事のあれどもわゆる凶賊の何條と云言のあ

るべき汝等よく心得よと云われし

蜂須賀阿波守至鎮古戦場の事跡を尋ね古き物のすれしを求め

られしハ八嶋の軍ハ義經の土佐藤継信を養うとて時最愛の大夫

黒とらふ馬を贈おせしし其鞍志渡の寺ふありしを彼寺の破壊

しをもを修補し鞍を乞得たり其後年久しかりと庫を司

る人くそし其事の由をあるは社の鞍の中みましへ置たり程經

と上田半平安重とて聞ゆる馭法の上手あり其地きくひあり惡

馬の有ど人々乗煩しし上田此馬ハよく鞍置と乗とらハガかり



ふんちりいーバあまうた鞍を出ー見せらふ上田ワとらうき鞍を取  
しと是こそとく彼馬ふわをとり上田をねむ者何條鞍ふ故あふへ  
ゆぞ見ふとく河つかりとふ二浦次郎右衛門とらふ鑲碗をあぐり  
一人年老さか此を見物ふ出と久しき名物の判官は鞍を見  
るふとしりーうは其故を問へ驚きとて悪馬もふとらり乗得とれ  
む上田が馭法ゆく名高く成ふとり

紀伊國根来谷の法師はむろー武勇を好む定まりう法あり  
と第一の功名ふち感状ふ玳瑁の槍三本銅錢三十貫其次感  
状ふ槍二本銅錢二十貫其次ふ八感状ふ槍一本銅錢十貫文根  
来の内ふ大澤仁右衛門とらふ者一番槍を合ち感状ふ槍銅錢  
をも添とけ得ーが大坂とて秀頼ふ従ひ城落て後九鬼の家

おろーが大坂築城の人茶銅せりれーを土井利勝ひとくにやーあ  
置きとり

加賀利常お仕ー大音主馬助お若き人やあまうらふ大音心とた  
けく候はんされども今ハオー事叶ふと麒麟も老ぬればとらふ  
事思ひ出され候とらふ主馬聞と五町十町かけ走りとも敵の真  
中ふ只一人かけ出る事あり易き事あはげ早く走らぬとら  
はのみ益あき事なり先ふかけ行人ありと後まづくをまう思  
ふの老人もはげとらふ槍あひハ僅六七間ふ過げ主馬が如き老  
あたらへと身も其時心剛なバおくれまう五町十町とら事  
を若き人のお易き事あとも六七間のきとら至りと箭玉を  
げーとれば若きとて走らぬぬりのありとらふ小皆詞あくとら

永田治兵衛ハ平生多病ありしハ何の用事もなきや人の口を以て下部こそ人健あるがまじけれ士ハ義と勇とありとしよを人々せんとあくるいふ詞ありときき朝もつる泉明榎井少く淡輪六郎兵衛が首取と旗本ハ行平生多病の男かゝるやとひ候も無病の人とち今日功名あり候やとふふ答る人なりけり又上田主水ハ宗古といひ一ヶ石田ハ與一と淺野幸長ハあけ置き茶の湯法師を召置きたりと議とせし幸長聞て上田ハ脇差を與へ汝を誅する者ありと聞必、大切の時ハ功名も心得あせうと詞をわけられ一ヶ石田ハ上田事ハ臨て又小血を深申さんといへをまゝ鼠の血なぐぐハけけ得とといふもが榎井あて目を驚

うけ軍一と討取る首を提げ幸長の日出て王子の陣に至り士ひいと幾れも並居たる處より茶湯法師はなまらけり一人々よといへるふとかくいふ人ありけり

榎井の軍ハ大坂夏の事より大野主馬大将より搦圍右衛門先陣より和泉を攻入りけり岡部大學塙が武功をそねて抜けり阿部野を和泉路より進み行四月二十八日夜明と國府の東の山に烟のしめを岡部が士どもすそや相圖の火の見やるといふ礮通明神の北より貝塚より進み行淺野長晟ハ信達も陳せり大坂より大軍よすと聞榎井ハ引返さる搦我行と敵の体見え来らんとて唯一騎淡輪六郎兵衛といふ案内者を引具りて馳行處ハ岡部を見つけ搦馬の上よりめけけ

たりたりと今朝の軍を聞くと罵る岡部敵あつれば功  
 名もあつたりと互に罵りけるがあれある安松を焼拂ひて  
 ちかりなん又蟻通の松原お伏兵あつてん覺束あつて後陣の  
 くをすさんどく物見を出し長晟の士大将淺野左衛門佐安  
 松お来りと龜田大隅おとく兵をあがりられとつり又塙物見  
 乘歸りて敵近く候とつを岡部聞て曹を取て着馬も  
 ろ鎧を合せりかけ出れ塙つて後陣をすてとつてとつて耳  
 ちも入に塙怒り汝先を駈せんとやといは是も馬を乗出  
 け龜田八殿と引退く處お透間もあつて追懸り大隅八討  
 死まごぞと思ひ定めて石橋およりと十文字の槍を横へ待つけ  
 たりと淺野左衛門見ると何とて軍あつてとつてとつて事ぞと

く引退れとつて上田主水八極井の家の中おかくれ居ると左衛  
 門をやり過り後子残り居ると淡輪真先うけくとせ入る處  
 を永田治兵衛討取りかけると大坂方おせよする處を上田主  
 水槍を提て散々お相せり山掛三郎左衛門と引くたり  
 横井平左衛門横関新三郎かけりて山掛を討とりぬ龜田  
 を始とて殿の者ども面もつておあめさきとつて相戦ひ  
 ば大坂勢敗北す塙八田子助左衛門が射ける箭お痛手を蒙り  
 十文字の槍を取ると田子が弓の弦を突切る八木新左衛門も  
 さげ走り寄りて塙家の壁もつれと思ふと働きて終つ  
 討死す大野八貝塚みく先陣の戦を聞かけつて八極井の軍  
 散つて又一説お淺野但馬守長晟紀州を打立五千の兵

みく泉州市場せしちや着く大坂より四万よんまん向むかを聞き淺野左工門  
敵かたいづくふ向むかも市場表いちやうみく一戰せんせんとのふ龜田大隅後かみの  
勝かちとて大事だいじあれ四万の敵を五千ごせん支さへん事地利じふよと  
一里引退いきりたまと蟻通明神の松原を前まへふあく安松やすむね先陣せんじんを押お  
出で敵を引付八町はちまちあてをくり引ひお極井ごくせいみく戰いくさまん此所  
松原ありと敵かたみ見みさるれど八町はちまちなをくハ双方深田ふかたみく一騎いつき  
打うあせ人多兵おほひやくわたりがたし然しからを一騎合いつきあひの勝負しやうぶみく必定味  
方の勝利しやうりなりといふ淺野聞あきのと敵の旗はたをどに見みどし北きたん  
事然ことごとくべ龜田ハ引ひきよ我ハ引ひまどきとら龜田我此所かみよ  
く功名こうめいを遂つひま討死うちしせんと言こと言こと一いつく出陣しゅじん一いつくせ極井ごくせいよ  
於おく一番槍いちばんやりを合あきさう討死うちしクニの中なかをを出でずああと一戰せんせ

られ必敗軍かなげたつととら淺野怒いらく物前ものまへふ不吉ふきちの一言いちごんなりと  
罵ののりてを淺野左近あきのよりあつらひ所詮しよせん但馬守たにまのりの下知げちまきと  
とく前田越前まへだを以もて事のことを申まをし長晟ながと兩人りうにんの存ぞんる所ところ尤なほあり  
龜田かみと度々たびたび武功ぶくうなまれの物もの一いつく先陣せんじん五千ごせんの下知げちハ龜田  
心のまくにせよと下知げちせらる前田まへだ帰かへりて斯ごとくを龜田かみ涙なみだを  
流ながし悦よろこびをり軍兵ぐんべいを安松やすむね引ひとる處ところふ淺野左近あきの同日いつじつ向安  
井喜内いぎない田子助たごすけ右衛門ゑもん伊藤いとう金左衛門かねざゑもん等ら従したがひたり安松やすむねの長  
滝村たきむら陣ぢんに市場いちやふ殘のこる淺野左衛門あきの同大炊仙石おほなほせんせき因幡いんぱん三木みやぎハ  
右衛門ゑもん未明みめいふ安松やすむね兵へいを引取ひきとりて陣ぢんまき野のあぐ  
極井ごくせい入いり半なかハ河原かはら陣ぢん一いつく大坂おほさかの軍ぐんハ瓜生野うりふのみく勢せ  
揃そろ一いつ先陣せんじん高岡たかおか右衛門ゑもん二陣にぢん岡部おかべ大學だいがくなり一いつく二人ふたり不和ふわ

主馬ハ酒宴一々打立ビ其時塙ハ三百計の兵あり安松みち  
 世入火をみる龜田ハ蟻通の北へ物見子出る所ハ淺野左衛  
 門乘来り攻めたり一所甚感ト入りとる龜田物前の  
 積り論ず事ハ珍一々事ありとる旗本の旗色とど  
 ろなり直されとる人む左衛門心得たりとる乘戻りかゝる所  
 子上田主水来り今日の合戦いりふとる龜田昨日計り  
 如く樫井より軍まゝとる旗本の旗色悪く見ゆるなり乘  
 戻り直されとる上田乘帰ると旗色いりくと直りたり  
 龜田其後上田を感トるハ此事なり龜田ハ南の町をぐる左  
 の池は堤ハ銃砲五十挺あり馬より下り立敵を待處ハ敵は

来る龜田思ふに引付下知一々銃砲を打すハ生死ハ  
 ありば騎馬の兵三十騎ありとる落方敵是ふためうひきし  
 砲ハ藥より一町を引取りも引取りかゝる三度くり引取り  
 樫井の町より引取馬を立並とる休に居たりかゝる處ハ敵味方  
 ハあつた東の河原より歩立の弓は者をひきおとる大将馬を  
 乘来り龜田河原へ乗出—是ハ大坂より誰の陣より候と  
 問ふ岡部大學と名乗る馬上より槍さけり成—時大學  
 馬を引返—北より引退く龜田きたる—返せと呼けり  
 一町を走り追捨る樫井より歸りて討死まどと獨言—  
 石橋子腰かけ十文字の槍をとり銃砲の者をとりあつたり  
 ちりあり唯三人残り止りぬ三人龜田が前より来て腰掛けど

足まゝぬまなり候落つてこそあつてとて少しもひるあふ龜  
田大子賞多る處に上田一騎乘來り先子錢砲の音一もよまなく  
も引とれぬまよとて龜田聞て我と御邊と二人討死するもなげ  
の山をもなげとて但州公ハ琵琶がたけを越さぬ給ひ自害し  
しとてハ誠なりや敵進み來るともあつて一時ハあつんてハ處に一  
騎ハ赤、まらぬ一騎ハ二三間おくれなむが黒くすけいとも者わけ來  
る赤き物具ハ塙黒き出立ハ塙グ手の者あり塙ハ龜田に向ひ塙  
が從者ハ上田に向ふ龜田立上り飛出き槍組より敵の槍龜田が南  
き二打三打ら處を十文字の槍と胸板又右の脇を突きつぎ  
伏龜田が士菅野兵右衛門來と首をとる敵伏あがら菅野が足  
を切拂ふ菅野が右衛門助け來り塙が上へ乗がり兵右衛門が首を

取せぬ上田ハ槍を打折無手と組する處に上田が手は者二人なすけ  
來りく敵をうち取上田ハ痛手あひたり龜田ハ猶進み出十文  
字の槍を足さ踏直し居たる處に又敵一騎わけ來り槍を合は菅  
野が右衛門槍をく脇つを突須田作兵衛其首をとる差物は谷  
下吉左衛門と書きたる此時敵一人來り龜田に向ふを突拂ひ  
たり大坂方まづうがへ先陣の大將討きくバ敗北したり  
東照宮の龜田が此日は軍を殊にあめさせ給ふとてり龜田ハ父  
を溝口半左衛門とて柴田勝家ハ仕子大隅若き時ハ半之丞  
とてり十六の時初陣なりしが柴田伊賀守ハ屬し越前白鬼  
戸女河原まづ一本木馬上の敵を打取り柴田父子感状を與へら  
又越前九岡の城へ一揆押寄たる時も功名あり志津ヶ嶽の軍

首取たり後淺野家仕へ小田原山中武藏忍岩槻  
 城攻も度々功名たりとて秀吉是を賞する文禄年中  
 朝鮮蔚山より敵六騎と馬上より大刀打し一騎斬り落し其  
 首を取ると幸長感状を興へる慶長五年濃州合渡するに  
 功名し瑞龍寺二の丸に先登し度々武勇譽せ高きなりとて  
 京都より台徳院殿御前へ召出され龜田が働かざればありと  
 御腰物を賜り上田も同様に賜物有る賞せしむるとり龜  
 田後安藝東條の城主となり一万五千石を幸長あてり子  
 細有る淺野家を去高野山學侶花王院のゆかり隠き寛永  
 十年八月十三日卒しをり  
 紀伊大納言頼宣卿の母君をば萬の方と申し駿河より塙團

右衛門ハ名高き大剛は士ありと聞て於子をらふ太刀刀をすらす  
 るハ常の事なり大将の寶とらふハ士子過たるりなりとて鏡臺  
 金とて毎年五百兩賜りし中を二百兩分ちて塙が流落せし  
 内ハ與へらるぬ事あり時ハ剛の若一人ありしとてき子ありし  
 らせんとしそらへりたりや

奥平の長臣奥平源八ハ父の誓同姓隼人を討し相與せし  
 士多し源八幼きより奥平の家を立去し一味の面々も皆立去  
 り源八が成長を待居る其中一人の士妻ハ稻葉丹後守正通  
 の家老士の女あり有るが父のもと預け置し頻りに誓討せ  
 しまふ及びて妻のもとへ行て存る旨のあはれ離別するなり  
 嫁候ひて親の苦勞も成給はざれといひけき彼妻聞て年久敷





置一を米澤見又おた馬ありと信玄申く五十貫の地を  
與へ此馬を信玄奉りぬ今泰平久しくなり馬を擇  
ぶの理を知る人なく益多に親の美子黄金を賞す事ふ  
成ぬあり是れ上より下よりまく軍旅不明なりざる  
故あり

○  
池田の長臣森寺秀勝ハ伊勢の赤堀郡萩の城主なり伊  
勢に國司攻落され藤元衛門秀勝其比幼なり母  
抱き落行尾州織田信秀のちかかれ居たり護國公池  
信輝の母君を養徳院とひ江州より落され清洲に來り  
藤元衛門瀧川一益頼く信長の乳母子出せし信長護  
國公と同年遊ひ相手となりて年をなかり故有て護

國公出奔し給ふ時森寺も同ト打つて赤堀に匿居る事五  
年及りかく信長星崎の城を攻りて聞て森寺商の体も  
とあり清洲の城に厨小行り物具を求め支度せむと存せし  
金も銀も候もあられ少し計給り候へと護國公の母君も潜  
ひこれバ我も金銀のあはれなりとも綾の小袖三ツ出  
森寺もあはれ入る森寺も出で銀錢六十ニ換り古き物具  
を買ひ給ひも曹あはれを詰み漆布を鉢巻し星崎  
向ひ給ひ信長悦み護國公をもこのごとくけり藤元衛  
門子を政右衛門とふまぐれあり者あり政右衛門忠勝十八  
歳の時よきの所あり有るや護國公の前あり時  
葉伊豫守一鍔のりより備前の陶とくを贈られ

政右衛門見く是ハ賈物ありけぬ物をたぐりて豫州さぞ笑  
 ひ候べし悪しき奴もこそ候へあまれ伊豫守が目の前みく打碎  
 まつてバ快く候べしとて護國公汝が詞無禮あり豫州が目の  
 前みく碎くばつて見よとの詞を聞き座を立ちてとて  
 を懐に入伊豫守の方に行きかゝる事とてあまれば對面せられ  
 一政右衛門よりを取出し備前みく焼たる物み候は賈  
 物あま返し申れとていもあま柱をあて打碎きつと走出  
 きバ一鍔それとめよと下知せられしおかけのびく帰るとて護國  
 公ハ政右衛門がほろたまりし一定伊豫守のもとも打碎すべし  
 危き事ありとて門内子待給ひし所子歸り來りあませし  
 るしハ此ありとてとてのかけを口を取出し見せ申と後申し

くハ九君とある身ハ一言も謹あるべき事候先申せし詞  
 々無禮あれど碎くばつて見よとていもあま柱をあて打碎  
 き男の骨をきばつてとめよとて下知せられしおかけのびく  
 幸あり已後を謹し給とていもあま柱をあて打碎きつと走出  
 し比木全又藏とて士より有る森寺がめとて居たり  
 又藏が父ハ五右衛門とて大剛の者ありし或時野伏一揆し  
 々々木全山の中に居入りしハそれハソふと問ふ中へん不  
 かま候と答ふおどろく一揆のうち通りける所を山の上よりと  
 りとあめつて突まかりしは小勢を大軍ありと思ひ一揆さん  
 ざん不敗北しそれバ木全が槍みく中へんおかまるとせし  
 しそれし人あり

政右衛門又藏ふ心を合せ同國高木何某を討んと計り  
又藏竹が鼻の竹林ふかくれ待し高木夜中ふ打過  
處を走り出さ唯一槍ふ突殺し從者共を追ふ  
高木が子二人父の仇報ゆんと聞えし政右衛門或年江戸  
は行時荒井ふ宿せし敵道ふ待と聞え舞坂ふ行道の程三十間  
をりもなるし九八百人計待けりし政右衛門あつくと乗通  
りし敵更ふりありね政右衛門從者五六人少く馬を引返し仇  
の前ふ乗行是ふ待するハ高木ふ候やく申し森寺を仇ふり  
んと唯今何とく候しぬぞやと参りあんと大音ふり  
物ふ人あり政右衛門あざ笑ひあぞ討候しぬぞや此後我を  
たしとハ存もより候をばと罵りて打過江戸ふ赴きり高木ハ訟

政右衛門を討んと申されどつぐもあれ討候と許さ  
れしが又政右衛門ふもまじり防ぎをて仇ふりしをり  
勝ふせよとの事なりければ常は鑊五挺は火繩は火をつけ弓十  
挺は箭を聞ひさやとらし槍五本土三十人うち連たり秀吉の  
時出仕しつゝふもめくの如し刀をも殿中ふ携へしと許さる  
伏見の城を築くれし後諸大名出仕有し政右衛門ふもふ出  
仕せしむ仇の必窺ふべきといへども政右衛門くしつゝも候ハ  
ずとく出仕し秀吉の居間時次まき刀をいりも携へしつゝも其  
日ハ從者ふりしを置と廣間ふ仇の有る中を打通り事  
故ふく退出しつゝ後慶長四年ふ参河ふ病死しつゝり  
○ 國清公 池田三右衛門尉 未議輝政卿 世を下らせ給ふ時伴玄札ハ寵臣ありしは

必殉死すべき者ありと人もいひをを興國公武藏守利隆朝臣 聞し召し  
 おく心を付し侍臣に仰られし御極をばらす給ふ日其  
 次の間なりし時をひらきそれ入り又閉ををあやし行  
 く見し六脇差をちや腹に突立をを抱かす人多く重りて  
 あし留置わくと申すに興國公急き御出有と玄札の  
 仰らるるに玄札策り御恩深く蒙り候へば御供仕りあん志  
 と候お見つけられしハ口をしく候御ゆるされきもく快く死出  
 の道に赴き申へしと申上るを聞し召しあるべき事なり  
 されども我士の主は成るを見すて先代の供あらん人  
 人思ふ様も玄札の先殿の志をぞ知り寵愛に遇つる身のあは  
 今の嗣は劣る果する故供しと死したるなるといふ人今

ぞの士一人は我も心服する者なりと我は獨夫と成らん事目前なり  
 我を獨夫とあはしむるを忠も義もあはれいあんうはそく死し  
 御供申す強き我あし留置まきや我ハ汝が死すも依り士の主は  
 成る事なりと只とく死すも仰られぬ玄札涙を流し存するの仰  
 き兼り誠に進退究り候と申すは興國公と死し我を獨夫  
 たりと先代への奉公とぞ再三仰らるるに玄札とくわの暫  
 ありけるが仰の趣兼り候ひぬ士との者刀を腹に突てあはれ  
 止べきは候はぬと只今の御詞より恥を去る人後指を  
 けられ候ともなぐに嚴在と申すに我士の主なる  
 事を得たり汝が忠義比類あるべしとてやと仰らぬ内子  
 いせ給ひたり

池田の家は士大将番大膳景次ハ父を藤左衛門景元と云ふ尾張智多郡荒尾と云ふ所の人なり大坂父の軍尼ヶ崎の城に片桐が兵ども討ちを被らざるより二心ありと東照宮疑ひ思召し聞えしは其子細を申述んが為使を参らば誰れも使せんと各使を擇び其姓名を書いて出れば吉興國公の仰より数百千の士半を過さ大膳が姓名をあるく出さず公自ら書記させ給ふも同ト云れは西宮の陣所より大膳不仰付らる大膳公の御前を退き出たる時長臣より始り之の言の上より重なる所を通うんとす小伊木長門大膳不向ひ今度の使ハ大事ありよく心得られしと云ひし大膳不才の身粗仰の旨ハ兼り候ひぬ此を云ふに懐く九寸の首の氷はよく見

やを抜出し至るべき物よく候大御所の御座近く参り申候より外ハ存候もいとひきき長門尤なり我行だと思ひおわくの如くなすはバツと事なりと云ひし二條の城に参りて東照宮の御前不召き子細を給ふ一々道理明くに申すに猶聞し召し入らるべき氣色おかりて尼ヶ崎の地圖を取出し武藏守露塵を二心ありしを申せし其時疑ひ思召し仰出さるる退し人々再三押返し諍ひ奉りて武藏守罪なきを申せし有様類少き者ありと感し東照宮に其後大膳が事を言ひし者なり誠ニ豪傑とは大膳あるべしと仰あり大膳ハおみ髪あらく容儀やき人なりと退出し時

髪ひげもいりうと仰おほりき其座ま不在な一人ひと々も御ご玄関げん出でと花  
くり且かつある人ひとふなりうとたり

番後ばんご祿ろく千石せんせきを賜たまり又後のち千石せんせきの祿ろくを増ま賜たまり芳烈ほうれつ公こう 松平新太郎  
政朝せいちょうの時とき至いたと政せいを執とり寛永くわんえい十三年七月六日じゅうさんねんしちがつにっぴつ病やまと死しま

常山紀談卷之二十三 終

常山紀談卷之二十四目次

- 一 熊澤了介くまざわらうけいの畧傳りやくでん
- 一 小櫃與五衛門ここぶとごゑもん會津神公えつしんこうを諷諫ふうけんせし事
- 一 水戸義公みづのぎこう御事業ごじぎやうの概畧がいりやく
- 一 渡邊數馬わたべかずま報讐ほうしう始末しまつの事
- 一 多賀孫右衛門たがひまごゑもん同忠太夫ちゅうたふ仇擊あひうちの事
- 一 大久保家おほくぼけの婢女ひめ主ぬし仇あひを撃うちし事
- 一 林田はやしだ右文みぎふみ劍術けんじゆつ妙手めうてうは事こと并馬びやうま爪源つめげん五右衛門ごゑもん先見せんけんの事

常山紀談卷之二十四

備前國 湯淺新兵衛元禎輯録

池田の家より政を執り四海に名を高く熊澤次郎八伯継了介  
 八本姓野尻あり加藤嘉明の士野尻藤兵衛一利が子より外大父  
 熊澤半右衛門守久養うく嗣となれ守久初ハ喜三郎といふ喜  
 三郎父を平三郎といふ尾張の人あり東照宮に仕へ奉り三形  
 原より討死し守久其後福嶋正則に仕へ正則安藝備  
 後を削らせ信州川中島に流罪の時正則は江戸の屋敷をか  
 こみより仰を背りバ忽討滅さんとなり正則の士大く出奔を  
 せし士只七人残りし中半右衛門も留まり正則江戸  
 を出く川中島に赴く時途より殺さるべいと云ひ守久節

常山紀談

卷之二十四

一

をまもりく附従ひ信州に参りて正則日比羅愛の淺りり事を  
悔きぬ後水戸の威公に仕へたり一利の後鍋島に仕へり島原の城  
攻に武功あり延宝八年八月廿三日備前岡山に卒し蕃山に葬り  
ぬ次郎八寛永十一年十六歳より備前より来芳烈公に仕ふ十三年  
島原一揆の乱起り時公江戸にあり仰を奉りて岡山  
に歸らせ給ふ此ハ一揆猶落城せしバ師を出さざらんが為なり此  
時次郎八ソまゝ元服せり故江戸に留置ましが自ら元服  
しとひそくに岡山に歸りたり十五年岡山を去り近江の桐  
原にあり居り二十四の歳高島郡小川村にあり中江惟命  
を師とて道を習ひ又高島より此時父野尻氏仕を  
求め江戸に赴く次郎八に母妹をとりて東近江の人遠き所

に殘りて幼少より一家甚貧しく江州の賤き百姓に  
食するゆりの雑炊を飯とて糠を食し魚肉酒茶の味を  
たぐやりに希子を著て寒をみせり五年相あひ人母妹  
のありて餓死せん事をあはれむたりたり中江王陽明の書  
を讀み良智の旨を次郎八に語り示し芳烈公伯継が王佐の  
才ある事をあはれりめ京極主膳不就る復来り仕へん  
やと度々問せぬに正保二年再び備前より参りて仕へ  
たり禄三千石を賜り政を執りて和氣郡八塔寺に備前  
美作播磨犬牙の如く入りて至る地より次郎八請取口  
とて和氣郡の中便宜の地に因りて田を墾き士數十人を土  
着たり此時伯継を助右衛門と稱したり公の参勤に從ひて



江戸子やく事度々不及せり世に名誉高く其道を慕ふ人多し  
 紀伊大納言頼宣卿松平伊豆守信綱板倉周防守重宗久世  
 大和守廣之板倉内膳正重矩松平日向守信之堀田筑前守正  
 俊其餘の大名數をあげて大猷院殿其人となりをめぐり信ト  
 給ひ召々尋ね問ふべき處不慶安四年かくせし世給ひて謁見  
 奉らり美應三年備前大木水出明暦元年飢饉の災あり次郎八  
 日夜國中を巡り撫育不心を盡し伯継日比儉不の家婢女寡  
 くといふ事少し唯客を愛し紐の土朝夕となく來りて相語る  
 伯継水理を論ず事妙を得國中水を通し沼を作り旱魃の防を  
 なれし馬の上より打詠め其利害を定め論ず不數十年の後  
 其言皆中つらなりとてり明暦二年和氣郡木谷の狩不山より

倒落此より脚を國ウリかく和氣郡寺口村ハ其塚地ありハ墓山  
 と名を更り世を趣りてあり  
 けくも山葉山五ヶ山をけり水と思ひ入るはけりさりをま  
 とし和哥の心多く名付しとて病ふり明暦三年祿を辞し  
 京不赴く其道を慕ひて門人となり人々中院大納言通  
 茂卿同通躬卿野々宮中納言家縁卿野々宮中將定基朝臣清水  
 谷大納言實業卿押小路三位公起卿久世中將定清朝臣久我右  
 府廣通公油小路大納言隆貞卿中御門大納言資照卿伏原三  
 位宣業卿を始とて何ぞ伯継を師とて貴び給へり此時所  
 司代牧野佐渡守親成人の諛言を信とて伯継を憎む又其才を妬  
 む者あり不たりと世にさへりしりや事ごとく何れも寛文七年四十

九ろく大和の芳野不匿也

この春ハよ一の山お山おるとなりとことおれ花のくらを  
とよのふ芳野その事

又山城の麻背山不引こより又播磨の赤石不移居延宝七年六  
十一歳より大和の矢田山不かくれり赤石を松平日向守信之  
の領地より日向守領地を大和の郡山不移故より貞享四年八月  
常憲院殿の仰不より下総の古河より日向守領地を古河不移  
或故なり日向守深く伯継を尊信せられり同年の冬封事を  
江戸不奉了政事更正去き旨を申さより大不旨不忤不事何り  
く永くとちめ置へまより仰出されり此後人の來る物語は  
不かり國政の事不及へハかさるる筈をとり吹く一事もいふ事

○

あー元禄四年八月十七日古河の城頼政郭不病死一城下の大堤  
村銚延寺不葬りぬ歳七十三あり伯継の學朱子王子不より別  
不一種の學をなるといふ文字も短かり政事の才其長也  
處自著せし書子見えよま爰不詳もきり  
會津中将保科正之ハ台徳院殿の第九男よりおをせし殊不豪  
氣あり近習の人不向ひく人々はきりむ所を尋ねらき不小  
櫃與五右衛門といふ者臣が樂む事ニツ有其一ハ家貧一く  
奢るとし事をちりて天より命ぞれ一貪をたのむよを申さ  
其ッを問ふは是ハ憚る所の候とて言ひあひく問まふ謹と  
申さるや大名不生きざるを天の眞加と存トたのむ所あり  
と答へるればその子細を問ふ不大名ハ天性かそく取ら候

くも臣下を馬鹿にしたり候。祿少き身ハ其師や朋友ありき事を戒め諫を候。其身を省く馬鹿にあはば候へども大名ハさもなく候。臣も者ども忤らりてハ身の為よりと存て其主の事を事あまバ山の如くおちめ申す。の悪き習ハを付候。かどふつとろく恣にたり。行それよりハ一言の諫をも申さく候。つら聰明もくも學問もなき教とふ事をあはば善事をへもつたきやうあきゆゑ馬鹿にたり。候ハ口をき事候ハ。ずや臣大名に生まざるを樂と存候。ハ此子細に候と申せば中將つらと聞召。さくもいひ。尤至極せり。今より馬鹿。成ざる思慮。さくも賞美のあり。即二百石の祿を増與へらまたり。そもより山崎嘉右衛門を尊信。學問を嗜む。後神



公と諡さ。此中將の御事あり。水戸中納言光國卿ハ頼房卿の第三の子東照宮の御孫あり。寛永十年威公の嗣。つらと定。さくも。バ嚴有院殿の仰。さくも中。山備前守信吉水戸に至り。光國卿三子成給。ハを見まかくと申上。く嗣。不定。まりぬ。正保二年史記の伯夷傳を讀く。深く感。さくも。處あり。是嗣ハ兄の頼重立。給。せん事ある。みかく定。さくも。さくも。長子の方。お家を譲るべき志。此より。さくも。起。まり。是より。又。學問を好。給。ふの志。篤。明曆三年より。大日本史を撰。び。始。め。神功皇后を帝紀を黜け。后。不。列。大友皇。子。を。天子と定め。南朝を正統と立。らる。皆。此。君の義烈なり。寛文三年頼房卿薨去。あり。葬禮僧家の法を用。ひ。を。瑞龍山。葬。

威公と謚一廟を水戸の城中に立らば祭祀の儀式を定め給ふ殉  
 死をき士あり一自ら其家子至りて止むらば其理正一を故に殉  
 死をとりしは此事聞えく殉死天下に統停止の旨仰出されし  
 を此君のゆゑあり又兄の頼重卿の子松千代綱方をあひて養嗣と  
 せし事事を乞ふ若聞入らば世を避るべき志ありしは頼重卿  
 許諾あり松千代の弟采女綱條をも引とり養ひ給へり明朝の遺  
 民朱之瑜とひい文學ある者清朝の粟を食せしとて日本に渡  
 りしを筑後柳川の文學安東省菴其俸禄の半を分て養ひ置  
 しを召し師と給へり綱方病ふより卒去有しりども弟綱條  
 を養ひ置き一故即世嗣となし給ひぬ延宝元年孔子の堂に水  
 戸に立給はん為江戸駒込の屋敷にかりの設をあし日本古よ

りの假字の文章を編む三十巻となりしを天聰に達し  
 後西院の帝名を扶桑拾葉と賜はり即献し奉りし天和二  
 年朝鮮の使臣江戸に來り三使進物の目錄禮義を失せし故三  
 條の疑問有し不答する詞ありしとあり 後西院の帝は 勅命  
 により風足といふ御硯銘を作らましりて 宸筆を下し  
 りて賞美せしむる其御詞の中不備武兼文絶代名士とありし  
 句有しを印し彫せしれしとなり元禄三年領國を綱條卿の  
 領りしに權中納言に任じしに程なく辞表を奉りし歌小  
 位山のあるもとに老の身はふもとに里を住よりし  
 是より常陸の久慈郡太田郷の西山に引籠りしに山莊の有  
 るは萱をもち菅門垣し葛をひりし只竹を種一重し池に蓮を

植西山のわたり不挑数百株あまた川の流は橋を桃源橋と名つけ  
 鹿をもち鶴をかきせりふりよくありきり瑞竜山小壽藏と設  
 彼衣冠を埋し碑陰の銘を自ら作らり久慈郡小野平村旗櫻  
 寺小祠堂をこく頼義義家の神主を置せり又攝州淡川に  
 楠正成の墓を修し碑を立て碑面小嗚呼忠臣楠子墓と日  
 筆一陰不ハ舜水の撰一讃をりせり又舜水の碑を瑞  
 龍山小建らき其文集を輯し門人源光園と称しりり彰  
 考館を作らり和漢の群書をあつめりり小遠國他郷小  
 學士を遣り半紙一行の反故をも見り小随ひ拾收めりり  
 了らど不色々の書ども編集有り中ふも禮典類聚五百卷  
 ハ日本古来より空典と称せりといり寛文五年領國中

舜水の  
 前の朱  
 之瑜の  
 ことあり

の瀛祠三千八百らちすく新地の寺院九百九十七除りき多珂郡  
 少く廣野あり一ハ馬を放ち牧らりり地地利を盡き術小  
 心を盡き海參白魚昆布を以て海浦小まき海小蛤をりりり是り海  
 物多く出づ山ハ參栞多く植せりり元禄十三年西山小逝去ち  
 り義公と謚せりとなり  
 國初より已來の諸侯中ふ會津の神公水戸の義公備藩の芳  
 烈公三公の事をハ寔ハ非常の君と稱し奉るべし神公の事詳  
 ある事をあきり義公の一世の事跡西山遺事小密ふありりり  
 只一二の大なる事をあきり吾藩の芳烈公ハ學校を作り賢才  
 を招き禮を以て度とふりり異國をりり衛の康叔武公燕の  
 昭王ハ如き君を并り芳烈公ハ比倫とふりり別ふりりり物あ

此篇ハ詳ニセバ

○

世に伊賀越のか討と云ふハあれあり

渡邊教馬弟源太夫が仇河合又五郎を討つるハ寛永十一年十一月七日の事なりと云ふ數馬ハ松平宮内少輔忠雄子仕と云ふ忠雄備前岡山におたりと云ふ比寛永七年七月廿一日城の大手みくおたり興行ありと云ふ其夜數馬ハ妻の父津田豊後が方子行々るハ河合又五郎教馬が宅にお来りてと云ふ易りてと云ふ源太夫と物語りてと云ふがゆゑ故や主従四人みく源太夫を切殺し又五郎ハ脇差の鞘を落しと云ふ行方と云ふ成ぬ折節と云ふ見んと云ふ群集しと云ふ不數馬が下部岩佐作兵衛頼ひ居しと云ふ外のまを聞出ると云ふ小路次の内より刀を提する者お出あひ何者多れハ士の家お刀を抜と云ふ入しと云ふ詞をうけと云ふ所お徒目付の遠山才兵衛お来り合せ

彼者を切とめと云ふ

一説ハ歩行の士三村孫右衛門通りかくり内のさわぎを聞き入り入と是を聞又五郎を追かけんとする處お何者とも云ふは女関お走り入ると云ふ孫右衛門を見と逃んとするを切伏たりと云ふハ又五郎が下人おひ付けと云ふ源太夫おとめをさてと云ふと云ふおとめと云ふと云ふ後お聞えと云ふと云ふ

源太夫ハ深手負と云ふ又五郎相手あると云ふと云ふ死しぬ豊後が方お告ぐと云ふハ數馬も豊後も又五郎が父半左衛門方お行對面と云ふと云ふと云ふ門を固く鎖しと云ふ入得ざると云ふ中お長臣荒尾志摩忠雄の近習加藤主膳おかけ来りて半左衛門ハ二人と云ふ受取ぬ忠雄半左衛門を菅權之介お預らると云ふと云ふ半左

衛門初<sup>ち</sup>安藤對馬守重信不奉公<sup>あつて</sup>せし故有<sup>か</sup>忠雄國不<sup>ま</sup>せし  
 一<sup>い</sup>半<sup>はん</sup>左衛門口論<sup>こうろん</sup>一<sup>い</sup>相手を斬<sup>きり</sup>出<sup>だ</sup>奔<sup>を</sup>一<sup>い</sup>渡邊<sup>わたべ</sup>教馬<sup>けうま</sup>もや  
 不來<sup>き</sup>り一<sup>い</sup>を潜<sup>ひそ</sup>か<sup>か</sup>一<sup>い</sup>と探<sup>た</sup>をあ<sup>か</sup>ら<sup>か</sup>一<sup>い</sup>身<sup>み</sup>多<sup>た</sup>巴<sup>は</sup>又<sup>また</sup>五郎<sup>ごろう</sup>を  
 出<sup>だ</sup>一<sup>い</sup>腹切<sup>はらみ</sup>ま<sup>ま</sup>き<sup>き</sup>の<sup>の</sup>と忠雄<sup>ちゆうゆう</sup>思<sup>おも</sup>を<sup>を</sup>一<sup>い</sup>半<sup>はん</sup>左衛門<sup>ざゑもん</sup>ハ更<sup>さら</sup>不<sup>ま</sup>其<sup>き</sup>  
 志<sup>し</sup>不<sup>ま</sup>非<sup>ひ</sup>一<sup>い</sup>又<sup>また</sup>五郎<sup>ごろう</sup>江<sup>え</sup>戸<sup>と</sup>不<sup>ま</sup>行<sup>ゆ</sup>くを安藤<sup>あつて</sup>治<sup>ぢ</sup>右<sup>ご</sup>工<sup>こう</sup>門<sup>もん</sup>か<sup>か</sup>一<sup>い</sup>置<sup>お</sup>き<sup>き</sup>  
 一<sup>い</sup>久<sup>く</sup>世<sup>せ</sup>三<sup>さん</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>阿<sup>あ</sup>部<sup>べ</sup>四<sup>し</sup>郎<sup>ろう</sup>五<sup>ご</sup>郎<sup>ろう</sup>兩<sup>りゆう</sup>人<sup>にん</sup>忠<sup>ちゆう</sup>雄<sup>ゆう</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>と一<sup>い</sup>年<sup>ねん</sup>久<sup>く</sup>一<sup>い</sup>來<sup>き</sup>れ<sup>る</sup>  
 人<sup>にん</sup>多<sup>た</sup>巴<sup>は</sup>治<sup>ぢ</sup>右<sup>ご</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>不<sup>ま</sup>か<sup>か</sup>と一<sup>い</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>る</sup>も一<sup>い</sup>治<sup>ぢ</sup>右<sup>ご</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>申<sup>ま</sup>々<sup>々</sup>ハ半<sup>はん</sup>右<sup>ご</sup>  
 衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>を渡<sup>わた</sup>され<sup>る</sup>不<sup>ま</sup>其<sup>き</sup>ま<sup>ま</sup>又<sup>また</sup>五郎<sup>ごろう</sup>を<sup>を</sup>出<sup>だ</sup>ま<sup>ま</sup>一<sup>い</sup>との事<sup>こと</sup>不<sup>ま</sup>此<sup>こ</sup>旨<sup>め</sup>を  
 兩<sup>りゆう</sup>人<sup>にん</sup>忠<sup>ちゆう</sup>雄<sup>ゆう</sup>不<sup>ま</sup>告<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>も尚<sup>なほ</sup>も覺<sup>おぼ</sup>束<sup>た</sup>ま<sup>ま</sup>体<sup>てい</sup>多<sup>た</sup>巴<sup>は</sup>兩<sup>りゆう</sup>人<sup>にん</sup>た<sup>た</sup>一<sup>い</sup>く<sup>く</sup>又<sup>また</sup>五  
 郎<sup>ごろう</sup>を請<sup>こ</sup>取<sup>と</sup>出<sup>だ</sup>け<sup>け</sup>ま<sup>ま</sup>との起<sup>おこ</sup>請<sup>しん</sup>文<sup>ぶん</sup>を忠<sup>ちゆう</sup>雄<sup>ゆう</sup>不<sup>ま</sup>出<sup>だ</sup>け<sup>け</sup>は<sup>は</sup>く<sup>く</sup>半<sup>はん</sup>左<sup>ざ</sup>工<sup>こう</sup>  
 門<sup>もん</sup>を江<sup>え</sup>戸<sup>と</sup>不<sup>ま</sup>召<sup>め</sup>下<sup>くだ</sup>一<sup>い</sup>と取<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ふ<sup>ふ</sup>一<sup>い</sup>との事<sup>こと</sup>不<sup>ま</sup>及<sup>た</sup>く<sup>く</sup>治<sup>ぢ</sup>右<sup>ご</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>朋<sup>とも</sup>輩<sup>ばい</sup>

とも申<sup>ま</sup>旨<sup>め</sup>あり仲<sup>な</sup>間<sup>ま</sup>を除<sup>の</sup>く<sup>く</sup>ま<sup>ま</sup>故<sup>ゆ</sup>是非<sup>し</sup>不<sup>ま</sup>及<sup>た</sup>く<sup>く</sup>忠<sup>ちゆう</sup>雄<sup>ゆう</sup>不<sup>ま</sup>申<sup>ま</sup>す忠  
 雄<sup>ちゆうゆう</sup>其<sup>その</sup>欺<sup>あま</sup>く<sup>く</sup>事<sup>こと</sup>を怒<sup>いか</sup>り<sup>り</sup>と忠<sup>ちゆう</sup>雄<sup>ゆう</sup>一<sup>い</sup>族<sup>しゆく</sup>の<sup>の</sup>人<sup>にん</sup>々<sup>々</sup>心<sup>こころ</sup>を合<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>あ<sup>あ</sup>一<sup>い</sup>寄<sup>よ</sup>り<sup>り</sup>奪<sup>う</sup>ひ<sup>ひ</sup>  
 一<sup>い</sup>と<sup>と</sup>と<sup>と</sup>支<sup>し</sup>度<sup>た</sup>あり

伊<sup>い</sup>達<sup>たつ</sup>政<sup>せい</sup>宗<sup>そう</sup>ハ論<sup>ろん</sup>ま<sup>ま</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>一<sup>い</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>潰<sup>つぶ</sup>一<sup>い</sup>と<sup>と</sup>奪<sup>う</sup>ひ<sup>ひ</sup>も<sup>も</sup>より<sup>より</sup>外<sup>あ</sup>ふ  
 一<sup>い</sup>と<sup>と</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>一<sup>い</sup>と<sup>と</sup>なる

三家<sup>さんか</sup>の<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>方<sup>ほう</sup>和<sup>わ</sup>平<sup>へい</sup>の<sup>の</sup>取<sup>と</sup>計<sup>けい</sup>ひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>き<sup>き</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>の<sup>の</sup>事<sup>こと</sup>遂<sup>す</sup>に<sup>に</sup>半<sup>はん</sup>左<sup>ざ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>ハ  
 池<sup>い</sup>田<sup>でん</sup>備<sup>び</sup>中<sup>ちゆう</sup>守<sup>しゆう</sup>長<sup>ちやう</sup>幸<sup>きやう</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>く<sup>く</sup>ふ<sup>ふ</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>所<sup>ところ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>雄<sup>ゆう</sup>痘<sup>とう</sup>瘡<sup>そう</sup>を<sup>を</sup>病<sup>や</sup>み<sup>み</sup>卒<sup>す</sup>去<sup>き</sup>  
 あり弟<sup>あに</sup>松<sup>しょう</sup>平<sup>へい</sup>石<sup>せき</sup>見<sup>み</sup>守<sup>しゆう</sup>輝<sup>き</sup>澄<sup>じやう</sup>同<sup>どう</sup>右<sup>ご</sup>近<sup>きん</sup>大<sup>だい</sup>夫<sup>ぶ</sup>輝<sup>き</sup>興<sup>きやう</sup>三<sup>さん</sup>家<sup>か</sup>の<sup>の</sup>御<sup>ご</sup>方<sup>ほう</sup>不<sup>ま</sup>訴<sup>そ</sup>  
 へ申<sup>ま</sup>旨<sup>め</sup>あり<sup>り</sup>も<sup>も</sup>長<sup>ちやう</sup>幸<sup>きやう</sup>も<sup>も</sup>卒<sup>す</sup>去<sup>き</sup>あり<sup>り</sup>も<sup>も</sup>半<sup>はん</sup>左<sup>ざ</sup>衛<sup>ゑ</sup>門<sup>もん</sup>ハ松<sup>しょう</sup>平<sup>へい</sup>阿<sup>あ</sup>波<sup>は</sup>守<sup>しゆう</sup>  
 忠<sup>ちゆう</sup>英<sup>えい</sup>請<sup>しん</sup>取<sup>と</sup>く<sup>く</sup>阿<sup>あ</sup>州<sup>しゆう</sup>不<sup>ま</sup>赴<sup>しゆ</sup>く<sup>く</sup>道<sup>だう</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>死<sup>し</sup>を<sup>を</sup>安<sup>あ</sup>藤<sup>てう</sup>を<sup>を</sup>始<sup>は</sup>め<sup>め</sup>咎<sup>とが</sup>を<sup>を</sup>蒙<sup>まう</sup>り  
 閉<sup>へい</sup>門<sup>もん</sup>仰<sup>おほ</sup>付<sup>け</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>と<sup>と</sup>り<sup>り</sup>寛<sup>かん</sup>永<sup>えい</sup>九<sup>く</sup>年<sup>ねん</sup>七<sup>しち</sup>月<sup>げつ</sup>備<sup>び</sup>前<sup>ぜん</sup>因<sup>いん</sup>幡<sup>ばん</sup>國<sup>こく</sup>替<sup>か</sup>を<sup>を</sup>仰<sup>おほ</sup>出<sup>だ</sup>さ

此時教馬立退く備前の児島あり又五郎がゆく急を尋れども  
知まじし教馬の姉婿荒木又右衛門大和の郡山に在るが又  
五郎が伯父河合甚右衛門も同く郡山にありて暇を申す奈良に  
出てもや急又五郎が行方を聞んぬ教馬又右衛門方ふやきし  
又右衛門教馬一人にハ危し助太又さんとも明る年の三月ま  
ど荒木がもと止め置三月又右衛門暇を乞得て郡山を出ふを  
是ハ甚左衛門が惡口しともふよきとともいりさく教馬又右  
門ハ攝州丹生の山田子妻子をあげけ置四月に江戸に赴き所々  
まをまごも行方をまごに甚右衛門を六時々見つけりども誠の仇  
みりうざれば打過ぐるを甚右衛門ハ嘲まるとうやかく又丹生は  
山田に帰て明る寛文十一年大猷院殿御上京にあり京都に赴き

方々尋ねそれども行ありて丹生の山田に帰て其後又五郎有  
馬に行くと聞有馬ゆゆけども行ありて奈良に甚右衛門が妻子あり  
とまば十月朔日奈良に行くと潜みまきく甚右衛門が方ふ又五郎か  
くき居て十一月六日江戸に赴くやなまば其夜か寄べきとを  
一が奈良の商家の事なり途中ま討つとて教馬又右衛門  
主従四人甚右衛門がわたり立明し六日の朝先ハ甚右工  
門中ハ又五郎その跡に櫻井半兵衛是ハ又五郎の妹婿なり弓  
鏡砲の上下二十人なり七八町なりもつぎま行ふ又五郎其日ハ  
伊賀の島原とつふ所宿に四人見知まるとハ裏の道もあつた  
を多破す三町計も行過宿をわるとす世に怪しき  
島原へ心得らまざる人とも四人宿をかりつきと告遣りしその



由を又五郎が旅宿へちりせり数馬も又右衛門も敵みきとせられ  
 トと夜深く出ろ山をりり伊賀の上野小田町にちり宿  
 をかり最期の酒かりりて待りけり看ハなやとワバ是をふ  
 りともとく竊をニッ出り皆頭なり数馬目出度とソリ主  
 人酒の價をちり金子二十両をり投出り與みれば驚き  
 たり是を限なきバ何のせみせんとソふ所み主人の女房か  
 つきざしを出り数馬心の付さしとくソをささり又右エ  
 門着り羽折を脱る主人も興へ庭に飛出るをり上り  
 一も有様きやうある男のそを限りと思ふきりまあり  
 ソきく只鬼ちどりかくあんと見えりと人後西語りり  
 七日の朝又五郎島が原を出り上野ふり又五郎ハ思ふ仇な

まハ数馬討とむべし甚左衛門ハ又右衛門立向ふり半兵衛ハ  
 又右衛門が若黨武右衛門數馬が若黨孫右衛門兩人わり合  
 へりと相定め間近くありとれば又右衛門真先き甚左衛門  
 不詞をけり飛りり

一説ハ又右衛門のち甚左衛門日比のどとせぬきを見ん  
 とソも終らば一刀ハ切とせり

馬より切り落さ甚左衛門刀半抽けりを二太刀少くち  
 留り半兵衛ハ槍の上手と聞えり槍をちりせげ馬  
 り下んとする所を武右衛門一太刀切りちりあき手  
 ちり立ちり従者槍ちり半弓をちり射り透間ちり切  
 かりりば二人爰を最後と相働きり所ハ又右衛門け来

りく多勢を切まくり半兵衛不渡り合終に切伏し此時又右衛門刀を打折り其刀伊賀守金道が作りしとと教馬又五郎と切合し又右衛門ハ従者を追ちりりゆり寄て數馬ゆくま助太刀ハまきぞかまひりりハカをんと詞をうけられハ

一説ハ又五郎がうりりまはるとりり

教馬飛込り又五郎を討しとめりりか所ハ藤堂高次の士彦坂嘉兵衛上野不在し数馬が親類ありりばり来り其外上野の士あま集り數馬又右衛門主従とも嘉兵衛方ハ引りぬ又五郎甚左工門ハ其場子死し半兵衛ハ息かり居るを引取たせ程り死す數馬十三所手負

武右衛門痛手り其夜半に死す孫右衛門手十所ゆりりか藤堂家ハ聞えり三人ハ吉兵衛方ハあまりり藤堂式部がよと年月を送る式部死し藤堂出雲守預けり寛永十五年六月江戸より仰下りり吉ありり數馬又右エ門も吉兵衛下り賜りりりり江戶の彦坂平六郎教馬が一族りりか藤堂家ハ申し乞り松平勝五郎光仲のりり賜りり因幡ハ赴くりり同年八月七日上野を出る藤堂玄蕃弓五張組の騎士二十人玄蕃が騎士五人藤堂出雲外ハ母衣の者組の騎士四十人彦坂嘉兵衛錢砲九十挺弓頭二人弓四十張田中源兵衛歩行の士二十人引續り伏見因幡の屋敷にれりり請取のりり因幡の士横川沼大夫父子錢砲二十挺渡邊越中錢砲二十挺伊吹源太兵衛父子

鑄砲三十挺宮脇平太左衛門弓十張伊賀の者五人片上孫二兵衛父子鑄砲二十挺松尾惣左衛門父子伊賀の者六人福田権兵衛歩行の士二十人宮脇徳兵衛田中六郎右衛門其外弓の者二十人出逢う因州小赴く伏見より川舟多々下り海上の船ハ備前芳烈公の舟より出し多岐松平輝澄の方よりと船を出し大小二十艘播州坂越より陸路を經地主より馳走の士出迎ひ草深き所をかりせ道筋山々遠見を出し夜ハ篝をたくせ鳥取の城すく三とまりより引とせらるる仇討を數馬二十七又右衛門三十河合武右衛門四十若本孫右衛門三十八歳とぞ

○

京極若狭守忠高雲州松江出雲隱岐二州の主あり在一時其士ハ箕浦備後内藤兵庫多賀孫左衛門とらる者あり備後が末子與四郎といひ

ハ容貌美麗少く兵庫ヶ子ハ左衛門と情交淺く孫左衛門が子孫兵衛斯とも多々ど與四郎ハ心をくりけたり一ハ曾て無二ハソヒクち一ハ者ありと答ふそれまどくハの空あり名を聞くやとんとかきぬといひ一ハバ名を聞ばかり一人ハ害やせんと密ハ左衛門ハ告ぐ孫兵衛備後が宅ハ時々来ると幸なまると或夜與四郎が部屋ハ呼入進懇みかてな酔の後ハ左衛門出逢て孫兵衛をさし殺しとめを刺足のを割く屍を城下の塩津川ハすくたり夜中ある人な塩津川の下ハ屍ハ流る寄り見く誰がまどくとちれども自然ハ箕浦内藤ハ指さる人ハ有るまば孫左衛門聞て證據ありとくどもかゝる類ハ天命とく虚説あり物あり僉議を遂らると沙汰ハ及ばハ備後兵庫

を相手なりと訟ふ及ぶ忠高目付を以て密に聞ば果して實を  
 り多賀り訟理なきを棄置ぐきれども内藤箕浦兩人忠ある  
 舊臣あつたま立退けとひそかに知らせく箕浦父子内藤八左工  
 門雲州を出奔しそり孫兵衛も兩人の弟あり此時十三歳  
 小十一歳あり兄ハ後父の名をもち孫左衛門とつひ弟ハ忠高  
 とつり忠高卒去刑部少輔忠知ハ六万石賜り播州立野へ  
 所替あり多賀其比京極の家を出て兄の仇を討んとけり  
 れども幼かり一時の事故内藤を見知らば父孫左衛門がみ  
 抱し置つる浪人間市大夫恩を報ぜん事此時ありとつ附  
 従子孫兵衛が妹の子三田右衛門ハ相如をとり備後ハ土井  
 大炊頭小奉公とつるが年老と死と典四郎ハ二十あり病死

夫ハ左衛門小笠原信濃守忠修小奉公一祿五百石與へらま仇  
 あつたや名他所へ遣さるる勤勞もあつたん事快うい人  
 なみの奉公を許さるるバ永く暇を給つれとつふより江戶  
 の供列入りしきたり若仇討たばとつ小笠原家高天神の  
 走廻りしきりしの子其外徒の者六人内藤子自然の事河を助  
 けよとつ附置さぬ或時内藤土井大炊頭のもやへ使者ややく多賀  
 聞て歸るさり途中に出迎ひしハ左衛門人数多く引つ馬  
 上りくるを問あれしを内藤よとつ若打損しとつん馬  
 上り馳ぬとつん計りしとつ孫左衛門市大夫前より忠太  
 夫右衛門ハ後よりかり其間近くあり孫左衛門編笠を脱覽は  
 きりハ左衛門と詞をうけ頭を額へかけく切る忠太夫二尺七寸の刃を

かゝ飛飛びかり切きるきりいれりさふふし出いる鑑かん忠ちゆう太た夫ふが拳こぶし不ふ當あたり指さしの骨ほね白しろく出いるとなんん内うち藤ふじ落おちる所ところを孫まご左さ衛ゑ門もんに  
 たかかけく切き忠ちゆう太た夫ふ馬まの下したをくぐりと切きるとり孫まご左さ衛ゑ門もん始はじめ向むかふ  
 太た刀たう付つくば内うち藤ふじが從したが者もの幾いく刀たうと多く切きるときどもさめ深か手て  
 なくゆを散さん々ざ不ふ切き合あつるを内うち藤ふじが從したが者もの薙は刀たうをきりく右みぎの肩かた上うへ  
 の腕うでうけく切きくば左ひだりの手てに刀たうを取と直ちくると處ところを薙は刀たうを袖そで  
 口くちを左ひだり右みぎへへ貫つく孫まご左さ衛ゑ門もんが刀たう間ま近ちかくなりくは薙は刀たうを  
 捨すり薙は刀たうのおをふなりぬ数かずヶ所ところの疵きずハ蒙もうりつ遂ついに倒たふさく立たあか  
 らぞ忠ちゆう太た夫ふ右みぎ衛ゑ門もん八はち市し太た夫ふ内うち藤ふじが從したが者もの河かま切き伏ふせ追お拂はひ忠  
 大だい夫ふかけ寄より孫まご左さ衛ゑ門もんが頭かぶを抱かかきつふと問とまば思おもふ仇あや討うち  
 おあせめさ思おもひおく事ことありとく息いき絶たたり内うち藤ふじを始はじめとて其その

場ば子こ七しち人にん一いつ二に町ちやう迷まり倒たふさ死しする者もの二に人にん多た賀が兄あに弟てい三さん田でん間ま四し人  
 が手て不ふ掛かく都みやこに九く人にんを切き殺ころし忠ちゆう太た夫ふ疵きず三ヶ所ところ三さん田でん間まも  
 手て負おのどども三さん人にんとも死しぞ孫まご左さ衛ゑ門もんが面おもて不ふ編へ笠かさをけけ息いきつき居ゐ  
 る子こわりの人ひと出い合あ奉ほう行ぎやう所ところへ連つり行いき御ご法はうの帳ちやう面めん不ふ記きして討うち  
 ざる趣きざしを尋たずねら忠ちゆう太た夫ふりより兼かねり及び及び事ことなぐ萬まん一いつとせ  
 由よし名な不ふ事ことりれ討うちつとさんも計けいまぐり本ほん望ぼう遂ついに何なにの身み命いのち  
 けをくくべき御ご法はう不ふ背そむきたりくと刑けい罰ばつ不ふあふと附つ届とどみ及およ  
 べくと必かなら死し不ふ兄あに弟ていとも思おもひ極きまめ候まうと少すくしも屈まがせ申まを  
 述のたまふ又また三さん田でんハ近ちかき親おやとなり間まが助たす太た刀たうハつくと問とる間ま兼かね  
 り浪なみ人ひとなりを多た賀が恩おんを以もつて年とし月つきを送おくりぬ孫まご兵へい衛ゑ殺ころさ  
 せし時とき兩ふた人にんの弟あに幼わか少すくく仇あやを見み知し候まうゆ名な手て引ひり討うち

世候多賀タカグ多年タの恩オンを報ウケい候マシへばツ御答ミコタを蒙ウケり候マシともシ申  
 さぬ志シ争マく候マシと申述ウケる何ナニも申ウケ處トコロ尤モト至キ極クせりト帰カり候マシ  
 孫ミ左衛門サエ門カド卅サ三サン歳サイ忠チウ大夫ダイ卅サ一イチ歳サイ右ウ衛門エ八ハチ八ハチ歳サイ市シ太タイ夫フ孫ミ兵衛ヘイ死シ後ノチ  
 卅サ一イチ年ネンの後ノチ寛カン永エイ十八ジウハチ年ネン辛シン巳シ江エ戸ト大ダイ炊シ殿テン橋ハシ忠チウ敵テク討トウと世ヨふツ是  
 たり其ソノ比ヒ土ツチ井イ大ダイ炊シ頭カウの邸テ近チカきを以モて一ヒト橋ハシを大ダイ炊シ殿テン橋ハシといハ  
 となり多タ賀カ忠チウ太タイ夫フ後ノチ子コ難ナン栖シと号ナヅケり右ウ衛門エ八ハチ後ノチ茂モ左サ衛門エといハ老  
 年ネンの後ノチ茂モ入イと称ナヅケり正テイ徳トク二ニ年ネン九ク十ジュウ歳サイ餘ヨり讚サン州シュウ丸マル龜キ子コ病ヤメ死シを此  
 始ハジ終マシハ忠チウ大ダイ夫フが物モノ語ゴりたるを書カキ記キしぬらシを傳ツクへシふ記キせり  
 大ダイ久ク保ホ長チウ門カド守シ 一本松平周 防守を修る教ケウ寛カンの内ウチ所トコロ小コ奉ホウ公キウせシ女メ中チュウ老ラウある時トキ心  
 得エ過ワり事有アリ一ヒト女メの年ネン寄キ大ダイ怒イり罵ノり打擲チ及ツび中  
 老ラウ親シンも事ハ事あまきあのをと獨言コト部ヘ屋ヤ不フ帰カりお書カて

世々録  
 の在り  
 云ふは

下ゲ女メ子コり親のりとふやりぬ二人ニの女房ニ一ヒト人ニハ残りあんとソふを大  
 事トのこソソハやるみありとくわ一ヒト人トモ出イぬ道子ミチとあやした  
 事ト常ネ子コ二ニ人ニ一ヒト度ト出イされ事も覺えぬ顔カ色シロも只あるぞ有り  
 とくみを披き見るみちろく子細コみと自ト害ガイせらなりと書カのせり  
 さくこそ有レベクとく一ヒト人ノちたまのハとくやりま我ワハ帰りま  
 ちとくむべいとく急イぎ帰り見るみたや自ト害ガイ一ヒト人ト有レバ夜の  
 物モノ打ウけ小脇ワキ差サの血を拭ひ我懐イ子コくけあらぬ体み年寄キの部  
 屋ヤ不フ行キり申度マシ事トの候只ただ今イマ部ヘ屋ヤ来キらまとソレ一人ト程ハ  
 行キべいとソレをまバ帰ルりハまく行キ度ト及ツび一人ト年ネン寄キ来キ  
 ぐ夜の物をあくれバあけ子染ソる中老ラウハ死一ヒト人トあり其時トキ女メ房ニまきハ  
 今日ケ日ニの事みくわくハ自害ガイ不フ及ツび一人トあり主の仇とソレもあらぬ小

脇差を抜き刺殺し一より兩人を殺し一なるんとて一より一に問  
 る。ゆふととらゆりかきとり出せし証故ハこゝにせみ候と始終を詳し  
 い述主の仇を討留つ思ひわく事もなく候とて色も赤  
 長門守女中を残らず並べ彼中老の下女此事も思ふ子や  
 と尋ねらるし忠義との氣あけ事との驚き入りし口  
 をそろつとていひをばさるる存る昔を申候へとなりしに  
 りく存する事候べきと申しさるる此度の次第をひき  
 もなりとらふべきなり年寄の死し事もかげめ言ハ則年寄を取  
 立ち然るべしんとていひ出せし賞さるれ候とて  
 松平筑前守忠之の士林田尤文とてし八戸田流劍術の妙を  
 得し足輕廿卒二十人預り居し或時足輕六人人を殺し

出奔は尤文ハ折節馬を乗る有しが告来るを聞則馬あき追  
 付し足輕これを見立向ひ追つてきたるとハ他國に参りて申を  
 切勝べし今日まど頭なる者なれば切すといふ心ありし林田  
 静馬より下り六人同一人を殺して是れ必其罪の中輕重あ  
 るべしゆゑに殘らば罪に盡せし思ふは我も来りし其是  
 非を糾し明らめんとするに歩する所を一人たゞりしとて  
 りく刀を抽りかゝる林田刀の柄も手をひきけりも動さば  
 卒爾ありあやまちをたるといひ聞近くある時無分別者うねり  
 つひつ刀を抽りかゝる手の下に斬倒し皆静まきけ敵せ  
 一故斬らざ敵せば何とて切んやとてふを又一人斬りか

ぞ愚ある者ども哉死狂ひをせらるる者どもとてさうりやをせらるる踏込む  
 處を飛ち久一太刀斬伏たす皆氣をゆるめ一度斬かちせど  
 為みかくし三人斬倒しつ残る三人をりハ屑うハと思ひく又一人  
 斬伏せ一人も手負せ一人ハ蹴倒し手負せらる者ど蹴倒しつる者  
 と其帶を以て縛り馬打乗せ先みせり帰たり是れあどの  
 者あま筑前一國の士多く林田が劍術の門人なり馬爪源五  
 右衛門ハ錢砲百發百中の妙を究めらる者多く武藝を好し  
 うども林田が劍術を學び其故を問へども打笑ひて答へて林田  
 後答ありく死罪み行もせり馬爪親いき女み林田ハ茲邪あり何事  
 をは出さんも計アツとと思ひよりき劍術を學せん事ハ我も好  
 し望む所ありとつども已み師弟とせり後難み臨み坐ならん見

其有へり其其茲邪ありくみせけ士の道みをゆくべいかねるなり交  
 を結ぶるふあうと思ひより愚者も千慮の一得なりとて  
 語りて



常山紀談卷之二十四終

常山紀談卷之二十五目次

- 一 石井兄弟報讐の事
- 一 尾崎幸右衛門の女親の仇を撃つ事
- 一 伊丹康勝格言の事
- 一 佐藤直方直言の事

常山紀談卷之二十五

備前國 湯溪新兵衛元禎輯録

○ 青山因幡守宗俊の士は石井宇右衛門政春とて者あり因幡守大坂御代  
 の時宇右衛門も從へり赤堀遊閑とて人堅ありて其弟子源五右衛門を養  
 子とてあるが石井はよりありて頼とて心得たりとて天満の赤  
 堀とてある寺に置て常は宇右衛門がより來り親とてあるは小年  
 經て赤堀槍を弟子に教へておありとてせし小源五衛門が槍は  
 と精練せし人な教へん事覺束とて石井はひるるを赤堀用のさ  
 るのちあるが石井は立あまをよとて石井は汝がよりよとてし老  
 る身の立あまも無益とてしども赤堀怒りて止らぬゆゑとて  
 立合々ふ手もきく石井勝とては赤堀口をき事と思ひ延

室元年十一月十八日の夜宇右衛門少出る隙に忍び入りわき居て  
わける槍を盗と出—宇右衛門が歸るを待て戸の内へ入んとせし  
を突通す刀を抽て槍をたたくも十文字の横手より深手  
より倒れ死す從者何者そとゆと一太刀斬て源五右衛門に逃去けり  
石井が嫡子三之丞の番より有合や次男彦七郎に臥居より出ると  
それども部屋の戸を源五右衛門にけ置しぬ踏破と出るとも源  
五右衛門行方よりゆきしりぬ三之丞暇を申て彦七と共青山の家へ  
出源五右衛門が行方を尋ねるとも更し何方よりありとも聞えざりし  
源五右衛門が父遊開も同意めりやあらん此者と討ば源五右衛門隠れ  
居るとも同年の冬江州大津より遊開と切殺しられし京五條の橋  
伏見の京橋大津の町に札と建重恩の人を殺し逃走しんとす法の非

故大津より父遊開を殺せり汝か為るも仇を討つらん事を止し  
首を刎べし赤堀源五衛門へし石井兄弟の姓名とありしれども源五右  
衛門出ありしゆと尋みりぬ見出さば美濃室原村の犬飼源  
兵衛の妻三之丞彦七かとばあり是と便し美よありし彦七の犬飼  
一族よりしつりしるる遂に我一人仇とせん室原村と出より延  
宝八年の冬瀬兵衛の妻死し其翌年正月三之丞從者孫助を安藝へ  
使しやうし唯一人犬飼の家へ在て湯ありし處に源五衛門忍び入り  
其戸の側へ隠れ居て一刀は三之丞の深手を負せしり頃天和元年正  
月廿八日の夜の事よりくくしりし二の太刀は三之丞の刀持より右の  
腕を打落す三之丞伏しり服差を抜て左の手より赤堀が股を突  
きしり死しり座敷に犬飼の甥の茂七より者来り居しりし赤堀

飛とわり一つ太た刀た斬ざりし犬いぬ飼か聞き付けては十じゅう文ぶん字じのの槍やりとしりし赤あか堀ほりにに突つてはか  
ろろ赤あか堀ほりにに突つてはからのの堀ほりをを破やぶられししとしりし犬いぬ飼か見みては槍やりとしりし直ちか後ごにに廻まりしとしりし透す間まにに飛と出でては犬いぬ飼かヶが眉まゆ間まをを切きり  
犬いぬ飼か年ねん老らうとしりし重おも手てにに倒たれしとしりし赤あか堀ほりとしりし討うちまりしとしりし一いつ族しゆ相あ集あり  
松まつ明あきらとしりし燈あかりにに追おわりとしりし行い方かたとしりし知しらず犬いぬ飼かのの赤あか堀ほりがが大おほ坂さかにに宇う右みぎ衛ゑ門もん  
としりし聞き打うちまりしとしりし時とき十じゅう文ぶん字じのの槍やりとしりし突つ殺ころせしとしりし其その槍やりとしりし突つ殺ころせしとしりし思おも  
ひひくくれれもも呼よびよびよくくててののよよままらられれ討うちまりしとしりし悔くいいととししりし従したが者もの孫まご助すけ  
その明あきら日ひ歸かへりしとしりし此こをを聞き齒はみみかかみみととしし自じ害がいせせんんととししりしととししりしととししりしととししりしととししりし  
ああうう彦ひこ七しちもも此こ由よしととしし聞き弥や怒どりしととししりし伊い豫よのの親おや類なひがが方かたにに行いくくととししりし海うみ  
上うまま風かぜににああひひ溺おぼれれ死しすすととしし赤あか堀ほりににああひひ溺おぼれれととしし尾お張はりにに行い伊い勢せのの亀かめ山やま板いた  
倉くら隠ひそ岐まき守まものの士し青あお木き安やす右みぎ衛ゑ門もんにに親おや類なひととししりし思おもひひととししりし行いくくととししりし頓とん

て板倉いたくらにに告つげて祿ろく百ひゃく五ご十じゅう石いしああららととしし赤あか堀ほりととししりし者ものああららととししりし其その用もち心こころ  
甚しつ嚴げんととししりし他た國くによりより来きるる者ものハハ一いつ夜やのの宿しゆくととしし禁かぎ制せいにに見みああららととししりし者ものををばば城じやう  
門もんのの内うちにに入いりしまま赤あか堀ほり名なととしし改かめめととしし水みづ之の助すけととしし稱なづけし宇う右みぎ衛ゑ門もんにに三さん男なん源げん藏ざう  
友とも時とき四し男なん半はん藏ざう吉きち政せいととししりし兩りやう人にん皆みな幼こ少せうととしし安やす藝ぎのの松まつ平へい安やす藝ぎ守まものの士し田た中ちゆう左さ近きん  
右みぎ衛ゑ門もん石いし井い九く太た夫ふう迎むかへしととしし丹に羽う三さん太た夫ふうのの許ゆるしし養やしやう育いくすす三さん太た夫ふうのの妻つまハハ石いし  
井い家かよりより嫁よめせしととしし故ゆゑにに我われ男おとこのの身みににああららととしし赤あか堀ほりととししりし出いでし首くびととししりし此こ辭ことば  
胸むねととししりし一いつ女によのの身み年ねん老らうととしし志こころざしととしし遂つひにに事ことのの詞ことばにに二人ふたり恙あはれれ  
なくなく人ひとととししりしととししりし父ちちのの仇かたがひをを討うちまりしととししりし黄わう泉せんのの怨うらみをを散ちりしととししりし日ひ夜やににああららととししりし  
聞きせしととししりし二人ふたり遊あそびび戯あそぶぶととししりし心こころををああららととししりし仇かたがひをを討うちまりしととししりし志こころざし一いつ筋すぢをを  
りり従したが者もの孫まご助すけハハ石いし井い家かのの恩おんをを請こりし身みををああららととししりし赤あか堀ほり亀かめ山やまににああららととししりし聞き  
ててととししりし身みををややつつ魚いしをを賣うりし或ある鏡かがみととししりしととししりし亀かめ山やまにに行いりし

宿るくさやうあく城中へ入り、  
 時々陸際より、  
 傳へ聞我既十五及、  
 方有月日と過、  
 とも聞入を、  
 りん殿の仰、  
 うのかを得ん、  
 母の母の恩、  
 近比身も、  
 のは事、  
 といふん、

書とば、  
 居て天和三年、  
 かかく源藏、  
 関坂の下、  
 思ひも、  
 一々、  
 やめ、  
 及ぶ、

がー成長してと一族あり止るとも願ん元禄元年廣島と出て兄と一  
 所より龜山は入ん謀とありて板倉隱岐守卒去りてうま江  
 戸の屋敷より取りん手立せんとも半藏江戸へ赴き日傭たりて屋  
 日時々行くなりとも其便を得ず

従者孫助の年老病重りては越州へゆけと之とも何の面目ありて  
 仇と討得たりて廣島へ歸るるも源藏汝辛苦も病付りてい  
 まと敵討する時の至らぬや斯ましく心を尽せとも其甲斐なき  
 ろつて口をすれなきも親族との見づ給りとも一日の飯料米  
 一升とて價よりぬ僅一日四分なりやあつて日々をせ廻り  
 口より食く肌をあらわんとするも足らぬへよふや及ぶ草履の價も  
 其中よりとて出せ又手よりを求るも費なきをあらわぬる歎

難のありともちやうに安藝の一族あり聞せりてあつて  
 き語りたりて廣島へ行ぬ下部の身とて年久しく命を塵芥より  
 軽々たりつきたりていふる志をいふるも終り病重くと元禄十年廣  
 島より死するも

源藏江戸へ赴きて半藏が手より小心を合せ又上方へ歸り兄弟往還  
 誠は織り如く或時へ僅の商たり又或は近江の茶たりとあり或は  
 伊賀の山家の者たりたり詞づひ身のうらまひを多く不似習つてと  
 るがけたりとをわたり元禄九年半藏板倉の士平井才右衛門がりて  
 下部とありて奉公する便を得て龜山は平井歸りて半藏  
 供りて龜山は入事を得り源藏は上方へ赴き伊勢へ行通ひく  
 人目を忍び半藏は逢て仇の有様を傳へ聞平井病て死す平井と赤

堀と親しみあり其吊ひよ来る道よく討んとせりしふりあり  
 有らん赤堀来らて其手どくも空しく成ぬ其明の春半藏日暇をや  
 くりうば又亀山の辻四郎兵衛うりし奉公す辻江戸よりむく半藏  
 江戸は供ぢん志ありむくども亀山は居ん所の人請人は頼むべ  
 き人ありまば辻の供とて又江戸は赴く源藏目を病て久く療養は目と  
 過せうち小半藏江戸より又亀山は歸り忍び出逢と仇をうりて  
 も便を得む半藏又江戸は赴きし源藏も又江戸は行て町奉行  
 川口攝津守のりし参りて仇うりて願の書を出す是元禄十二年  
 十一月十六日あり半藏は何とて来らざるやと問ふ弟の所々志  
 い所を立ちめくりの中頃出いし旨を申し仇討んと志しゆり年  
 久しく成ぬゆふ今申出ぶやと問ふ小源藏聞て兄弟とも

幼少して敵の有家を存せん近頃兼り出し事ゆり申出さるる  
 といふ又兼り出さる前より申出ん外へ池間とて仇の跡わらむゆり  
 事と恐まの事ありといふ尤なりとて帳を記してきて攝津守聞届  
 らまぬ江戸御城の下馬のりし見付とて討とらるる許さるる  
 辱き由一禮し又松前伊豆守の許に至りてとて攝津守よりゆり送  
 らしむ帳を記してとて首尾よく仇討まゆりて式代とせきより源  
 藏は亀山は歸り奉公せんと便りを求めらるるわらむ金銀を惜ま  
 ず賄賂もくも他國より来る人の奉公もなき請はしむる人と思ひよ  
 り況や一金の貯へあつた源藏もゆりてとて元禄十三  
 年源藏又江戸は赴きし夏目八兵衛といふ者あ  
 りも上総の人なり下部を置んとせし半藏よりありて夏

目は告て駿河の者より伊勢の太神宮に参りて志あり給金に  
給つても奉公せんとたがひたり夏目さぶらへて源藏を下部か  
より兄弟日夜にわき忍びく心を合せ仇を伺ひつゝ其後石黒仁  
右衛門下部に至て實儀なる者あり源藏の心まめやうを見て甚  
心安うしつば請人を頼て事よくなりぬめくつ鈴木柴右衛門と  
者上奉公しつば夏目此人の勝りたる者ありと詞をそつて半藏も  
下村に仕う事なぐりつて主人より事大方あり其父は祿増  
きしふ半藏を若黨より刀は衣服を添て與へり兄弟今龜山  
よりありて時を待処に赤堀が當番の歸路を討つて定め元祿十四  
年五月に成ぬ八日の赤堀が番に午の刻に代りて歸り処を討

んとせしめ歸りて志を虚しくすまは其明の朝の歸路を討て  
各用意しつて源藏は殊に下部の事多し更よつて宵に  
少の間暇を乞得て町に出りれり龜山の八幡宮の道にやれ  
立寄て心まぐり着込を着神前に向ひ今日必父の仇をせんと伏  
拜み宮をさまの夜に明しつて二の丸に行空賦のこゝ半藏を  
待居しつて半藏は出んとせし時主人の用ありておとく成る処に友  
達より来りつて着込着て間もなく主人より囁ひつて刀はかけ置あ  
置らる刀をとりて飛出て二の丸にかけ兄弟は半藏を遅し待居しつ  
来りたまふころの中より更にわき赤堀其日唯一人廣間より出て  
歸りつて兄弟打つて二の丸の外より石坂門を打過る時赤堀は  
後よりわきわきて前より立ちつて石井宇石衛門の子源藏半藏より



詞をうけ源藏抜くも赤堀の眉間を切赤堀我刀の柄を請とめふ  
と二の太刀もうまげ切付たる処は半藏わけ来り赤堀が頭もふく  
し切付たる処をうまげ切付たるは立もあつて死し  
う源藏衆も刺貫てあまをさし従者も退しひつ兄弟の初赤  
堀の父を打し仇を報ゆる次弟も置くと常各一通帯  
の中へ入りしを取出し赤堀を袴よまみりし所は長臣板倉空右  
衛門が宅のあつたり我もく馳あつたり一年頃日頃思ひ暮せ  
赤堀を討し今世は心もあつ事なり刀の月釘のぶくんと  
切あつて尸の山も一年久し赤堀を警固せし恨もあらん  
と兄弟のひりし追くる人も待たぬ更に来り人なり半藏其時爰も切  
死し城外へ出て退手とす死狂ひせん京都の聞え

旅人の往來に聞えり安藝の一族も少く兄弟本意を遂し事を知  
るもさし城門をさし適せんといふも早く半藏先少  
わは出ても源藏もさし詞をうけ汝の用の事急ぐ主人のい  
しきもさし打連く城門と出ま番人も聞ゆる黒門  
をのり出く京口に至り龜山の西のん茶屋に至り追來  
る人よりぬれん道を得ん事難くはじまぬ馬も来て追來ら  
ん兄弟走り息切し思ふ切合も静し関川をわ  
り山に登りて見し追來る人なりぬれ龜山の西南一里半あり  
行きて小家に立ち草鞋を買し津の城よりゆく者ありと道  
問ひしと案内者あり十町余りも過く椋本の松原見え  
童をわし又道を引く北の野あり食物とさし

かく小川を渡りて口嗽て太神宮に向ひて如少より思ひ入る  
 仇と撃つ事の添よ廣島を出しよりあつていふやめく存も  
 小爰までいふ爰までいふ出する神の議と伏拜み伊賀の上野に出  
 山城の笠置の道と問伏見に赴き京に至り諸國の一族の  
 龜山より仇打と書しりて岐曾路より江戸に趣き  
 五月廿六日町奉行保田越前守のいふ行て仇討と由をせし尋問  
 事も有て越前守自出て兄弟と始終詳し問りて事大  
 松前伊豆守も小室より小過  
 年逢り人々出て悦びあつて青山の藝州の屋舗に住て石井清  
 太夫がふあつて青山下野守の嫡子筑後守此由を聞即使を以て兄  
 弟を引とれり其後下野守の領地其比濱松より遠州に

○

至り兄弟とも不罷せしと源藏後重き職を命せり  
 三州丸亀京極備中守高豊の弓足輕尾岸幸右衛門とり者あり同  
 弓足輕岩洲傳内とり者幸右衛門が妻と心とけ幸右衛門の  
 時さふふし中々受ひて恥めり  
 又或夜来り不肯りて有し処ふ幸右衛門外より歸りて此  
 を見傳内無禮者と怒りて思ひ刀をぬき幸右衛門  
 と一刀切て逃る女房ハ小女と居し居し不棄たる夫の脇差  
 とめいと傳内が逃るを退けし逃のりて脇差を投げ  
 傳内が右の肩より少く血付め冬の末夜より雪へあつて終  
 行方を知らず女房立歸り見まふ幸右衛門深手より死  
 はあつて悲しむちと大い傳内へ重罪の者と尋らけ

行衛とあはれ幸右衛門妻の妹の夫ある関根元右衛門とい  
 者のうゝ月日をおくけり只朝夕は夫の最後の有様口をく思  
 ひて歎きあがり病つて翌年二月に死し三歳より三  
 女へをばし養育す十三歳にやうと名をとり元右衛門夫  
 婦と實の父母ありと思ひ居るふ或時とるや父母の事と語  
 り聞て汝の母は我為姉と云ふ此子が男ありやと語  
 討つ事もあるふ口をく明くぬるきく空しくありぬと語り  
 りふや大に驚き今まで夢にもとらざる事どもあり御つと  
 よりかやふ人とありぬ事の忝きと云ふとさめくなく外  
 の事ありさて十六歳にやうりる時兩人に向ひ江戸に参りて奉公仕ら  
 ん父母のうゝ諸國の観音にも参詣せやと存るなり萬一一つも仇

につまみあはれと云ふ神佛に祈りやと云ふ兩人のりく止まぬ中々  
 らうと云ふふあはれと云ふ極家の侍村瀬藤馬と云ふが江戸に赴くふ  
 うのみやと云ふ遣つたや江戸に赴き番町の永井源介といふ御  
 旗本のりふ奉公に出る源介は劍術の弟子ありて日毎に来るに  
 やが勤有様殊の外心をつけて奉公するふ誠は疎く思ひのり  
 かる者の子とやと尋らるふや詳に事の子細を語り父の仇  
 を報ひやさん志すに涙を流し答へる源介はく聞て  
 女ありと云ふ父の仇を討たるふが我劍術の弟子と云ふ  
 て教へ試すふ才氣有て思ひ入る志なぬら劍術もあはれ進ませ  
 り夫婦彌々愛せり二年に及て主人ソクハ愛よの居らんよ  
 り主人とあはれ取換て仇を尋ねよと云ふふ心を附

夫よりそわと奉公せし小泉は十二年を過て主人七十人及べ  
 り其後本庄なる坂部安兵衛とソリ御旗本の家は奉公せし小泉文  
 内より五十餘有る男の有る平生酒の事と壯年の事と何れ  
 と語り出し大言せし若氣たる人の女房は心をくけり事よ  
 り其夫を切て棄てり昨日のや小思は早く月日  
 も過行く物語せしと聞てソリ様も似たる事もあると  
 思ひし聞届人物と心の中は思ひたるを吐きしソリ  
 國の隔りぬ委し事と語りて我ハ元讃州九龜より京極家の者を  
 うと有つ次第とソリ幸右衛門は子有つが女あり覺えん  
 肌とぬげば母の投つけし間  
 恥差の痕も見えろやハ只今突きて討あんと立ちがらんとせし  
 計とて思ひ返して何となく其座に  
 立其明の日永井のり小のさかかくと語りたる源介大に悦ひ  
 て則ちやと打連て京極家の村瀬より行告せしとて則  
 備中守は申て公は訴り坂部のり公より糾とて張給  
 事より文内を京極家より給りぬまが文内を獄に入置鳥  
 越の下屋舗は虎落とゆひ日と定め文内を獄より出して勝負の場小  
 出村瀬より村瀬よりを連れぬ肌より鎖の着込を着白ちぬ人の  
 鉢巻は一尺ありの小服指は二尺三寸の刀より虎落の中に入村  
 瀬より小用意とて其時より小文内汝より手は掛り  
 尾崎幸右衛門の女あり今更出合は事天道の冥加なりと詞

恥差の痕も見えろやハ只今突きて討あんと立ちがらんとせし  
 計とて思ひ返して何となく其座に  
 立其明の日永井のり小のさかかくと語りたる源介大に悦ひ  
 て則ちやと打連て京極家の村瀬より行告せしとて則  
 備中守は申て公は訴り坂部のり公より糾とて張給  
 事より文内を京極家より給りぬまが文内を獄に入置鳥  
 越の下屋舗は虎落とゆひ日と定め文内を獄より出して勝負の場小  
 出村瀬より村瀬よりを連れぬ肌より鎖の着込を着白ちぬ人の  
 鉢巻は一尺ありの小服指は二尺三寸の刀より虎落の中に入村  
 瀬より小用意とて其時より小文内汝より手は掛り  
 尾崎幸右衛門の女あり今更出合は事天道の冥加なりと詞

をわきま文内ちのま小語りおきておきてある此事とありて無  
念きも此刀も父も子も手もわたりて三尺の刀を抽  
て切合る横に拂ふ刀ありて切き二の太刀面より切り  
処をさやうと込て乳の下より切さけりあせりて静に首と切干  
余年の間志し仇只今討て父母も手向ゆと檢使よりひり  
と感ぜざる者あり備中守悦びく俸米わらき身の娘も孝行氣  
をいづるの士もわらきあせりて息女も付らぬるも

此物語讚州よりゆく人ありて問開く小更に麩ちる尼寺が居る  
所ハ九竜の風袋町とソリ處と

伊丹播磨守康勝ハ寛永年中御勘定頭三人を置き時其第一撰むれ  
農とつら商を通り民と恨み利と同くあせり高し其北商人の

運上金と公儀より甲斐國より出るる紙を一人一人あ  
まき入者ありて然る小又富る商人ありて内々告て今までの人の奉  
了処の金は一十兩より運上と奉る一某一人は紙商ふ事とやう給  
ふべきを申す此事尤然る議定あり小播磨守一人其心を  
得て問入す執政の大臣より此由を告て乞ふ事止す三年の後  
執政の人々播磨守より事請ふ者あり同職の人より一  
人獨用するも是と以て國用を足らざる資なきは少  
い少きありて小播磨守兼り今より盜賊のあせり道  
はりゆり甲斐より答ふ人々ソリなる子細を問はる小播磨守  
日本のりり紙を中みり紙を中みり紙を中みり

貴賤一同小一日もちくく叶ふぬもの少く候其價の賤しくまばらしく世  
 のくまがふちうしく望み請ふ者今や商人の奉りより千兩の金を  
 多く事此千兩より出づる此紙を商する價を増てあまむと又  
 多く買てあまむ人よりいふはよめりも同く利を得て商するにせ  
 んとてふ加さるる増て後より價甚貴くちり人凡一帖の紙  
 價一二錢とさるる富る人の憂くもあま足す貧賤の人百も得る  
 所の利誠よきなり一僅一二錢を累して妻子を養ふわくあま死者  
 多く今口よりいふ紙やうの物を常々用ぬ来たり價忽よあまらるる  
 て更は何物を以て此は換ふ然らば是らも又あのみかあれま物にて  
 もあれ其價をまて其得る所の利を以てま紙を買より外の事候へ  
 ト凡一物の價増を時ハ万物の價同く貴くちり事皆定まらる事なり

價貴くちり小至て求んてくも得るぬ或ハ飢或ハ寒やうも及へ  
 一飢寒さるるれ必死も死まれも守る処を失ひゆゆい士より上つる  
 の事よりさく下さぬの人の飢て死し寒て死す盗しつるも死す死ハ一定  
 ちり同く死する命よりいふ一日も世よあまらるる思ふに賤しく  
 ちりひちりさるる盗賊に起る事よりいふは只農と商との事  
 のやういふ士士の召仕ハ奴婢等も物の價貴くて求得ぬ盗む  
 事同く盗む世は成るん時よ至りていふは政事をりて  
 まるとと給りやちり盗ハ貧より起る事よりいふは又民  
 よやうて利を争つる其利上よ歸るるちり給るんは天下其風よ  
 靡き従ひよき人々共利を争ひ各其欲する所を得んと思ふ人々  
 ちり盗む盗人より其禍盗より増やるる天下とならる給

天下の寶は御寶なり且上の費も小省せしむる一年  
の中はつむ所の御寶幾千万兩の事ども僅千兩の金と  
まさんとして盜賊起り世の風みなり成ゆん事身の肉を切て飢を  
救ふは腹は満る時身終るなり小同なり大畧物の價の貴く  
なりゆく事の國郡は運上の多きう致さる某既は年老め頓て死  
し申す相構るその後もわろ事申す者あり人も人々よくくわえん  
とつひなき人々感へあつたりなり

○

佐藤五郎左衛門直方ハ學問にて世に聞えり酒井忠清賓客のも  
てなり小禮せしめて終りたり井伊掃部頭ののち小ふりゆり  
掃部頭の前より出ざる中長臣と物語り時直方云大事ハ論  
候聊のよれも傳授なりしく申事の候て師に就て學び誓古一思

慮をも尽し後を遺りて得るものなり小日本の人々の大事のしるは  
つとて傳授誓古一の事もなく自己の料簡より事を濟しぬ  
とあり各々存候りやく問ふ皆々問ふと問ふ事ハ國家の  
政に在り萬民の命は一言の國の安危に至極の大事ゆ至聖  
人の教ありて萬世の鏡ありて今の大名君臣とも心  
づらん只自己の思慮を思ふすは政をなすの危き事の至極なり  
と語り直方論ま格言として予筆をこころとむるの  
意なき小あはれ後の此書と讀む人々を察せしめたり

常山紀談卷之五 大尾

常山紀談跋

湯常山先生。錄勝國以來。事蹟。為紀談。若干卷。蓋先生之意。謂文武之道。一己出。將入相。古之君子。皆爾。歧而二之者。後世之為也。夾谷之會。仲尼奪萊。庚之膽於立談之間。魯郊之戰。冉求折齊之衝。於用矛之末。其定禹湯文武之誓。周禮大司馬之



所職。可以徵也。夫一治一亂。天之數也。不通文武者。非全材也。白面書生。不知軍旅。拱手讓諸。武人俗士。寔可憫也。兵家者流。生長太平之世。目不見兵革。耳不聞金鼓。翔翔然。徒欲以空言取信於一世。亦可憫也。故當今欲講軍旅。以備不虞者。無若熟知戰國事情。熟知戰國事情。而後甲兵可

試也。軍旅可明也。先生之有紀談。蓋為之也。先生學綜古今。抱文武之大畧。左治則臯陶伊傅。左亂則管樂張葛。何所不可為乎哉。雖然。時命難遭。屢起屢蹟。終不能用牛刀於一時。抑又堂二之陳。正二之旗。風雨雲雷。交發而並至。龍蛇虎豹。變幻而出。沒者。不及見之也。則我獨憾先生之志。

大而不能敢用矣耳。一生精力。半在茲書。  
先生嘗云。

明和庚寅冬 赤穗 赤松勲謹跋

常山紀談

拾遺

一二

135  
15  
116

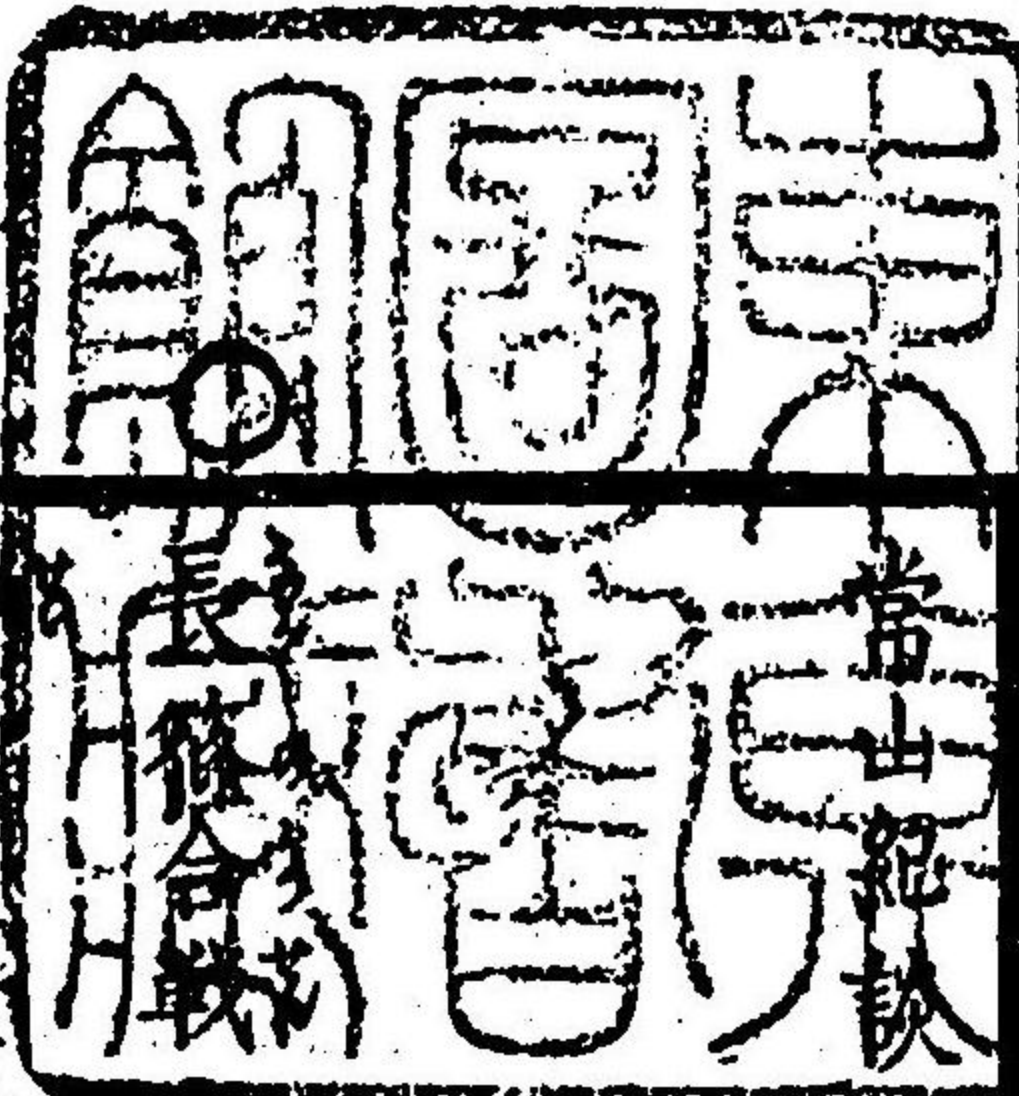
東 京 圖 書 館			
一 五 冊	<del>五 一 號</del>	<del>三 五 函</del>	和書門 雜史類

常山紀談拾遺卷之一目次

- 一 長篠合戦ななせのくさ武田勝頼たけだのまさより人数にんずと出でる事
- 一 家康公いえやすのこう曹そうの心得こころえ御示ごしの事
- 一 家康公合戦いえやすのくさ心掛こころがけ御示ごしの事
- 一 小幡景憲こはたけのあきら物語ものがたりの事
- 一 野間左馬進のまのさだまさ田螺うらまを以て勝負しょうぶ占うらない物語ものがたりの事
- 一 老功らうこうの士相しあう言葉ことば物語ものがたりの事
- 一 家康公駿府いえやすのきんぷより相討あひう御吟味ごぎんみの事
- 一 柴田因幡守しばたのうたのり退治たいぢ上杉景勝うえすぎのあきら出馬でまの事
- 一 紀伊大納言きいのだんなごん頼宣よりのぶ卿十三歳きんざい少く大坂攻御先手おさかこうごせんてと望のぞむ事
- 一 高麗攻南大門合戦こうらいこうなんだもんくさ物語ものがたりの事

- 一 越前黄門秀康卿伏見御屋敷へ於國と召す事
- 一 津田長門入道道慶物語の事
- 一 大坂落城の辰細川玄蕃頭槍合言上の事
- 一 伊藤伊右衛門武田勝頼と討つと津田幸庵物を討つ事
- 一 塙圍右衛門持道具の事
- 一 筑前岩出城攻秀康御年十四歳より武勇御心入の事
- 一 越後浪人大井田監物の事

拾遺の正編は比喩多し文體とてやうやくと且主意  
 くく又假名の用か方成失ひ一處もおぼへ今一々  
 校正せしむるにあつた暫く原本のまゝに從ひぬ



常山紀談拾遺卷之一

備藩 湯淺 元禎 述

同男 明善 校

武田勝頼五月廿一日より人数と出ま信長見給ひ敵も多  
 勢あり三萬可有と宣ふ家康公仰ふ此度の軍味方勝あり敵丸く打  
 圍ときハ六つ敷散て人数と多勢と見まゝの勢と頼もる間大方勝  
 ろりと御意あり酒井左衛門尉承て尤ある義と奉感あり  
 家康公被仰候ハ小身の武士着料の具足を威させ候とき胴籠手具  
 外ハ鹿相ふりさせ候とも曹を念入る心得がよきと子細に討  
 死ととげさるとも曹の首と一町敵の手とつるものなり然るとも  
 死後の為うけ無くとも仰有候とより右の上意に付上田主水入

道宗古物ぐり致し候ハ士の討死と遂げ首成りし其の義と心  
掛りよき事あり去よりくさやきまどの後さうりあるの佗言づくに  
る見苦しき間若き衆中必後高し刺す人明日ハ必一戦と知ま  
る前日ハ首と奇麗しつて心得第一の由くさる

○家康公或とき上意今とき人の頭をもさるものども軍法ごころ  
て床机ハ腰とくひさのものを以て人数と差使ひ手をもよさば口の  
先の下知ごりや軍に勝るものとの心得る大きき違る一手  
の大將たるもの味方諸人のかんのかをさうりを見て居て合戦ある  
勝る事とさるゝと被仰候とあり

○小幡景憲の物ぐり大坂陣のとき堀殊のあらうりく攻め  
とき本多佐渡守とく金堀と入て堀ぬき可然と家康公へ申上ら

まければ尤あり然るゝと仰付らまはる土佐或ハ伯耆佐渡より  
呼上せよと詮義のとき佐渡守しと右の國比との不功とん  
甲川の信玄金堀度々勝利ありと甲州より金堀とよび已まをん  
とを城内に此由と聞て甲州より金堀来て此城を堀くさるとぞ  
いさなり其内と和談と成たり何れ五年や十年の内より七十間と  
ある堀とありとん是れ敵の氣を奪ふ道理あり遠州高天神  
の城に小原與八郎と申人籠城ありと早く早速金堀と矢倉を不  
り落しとや城をけりて敵城へ堀をりの矢倉の下ま堀  
付らり是れとくさる又くさるとさる鏃砲の薬を百貫目とく  
も横切火繩とく付らり我籠城へ敵ありとさる必をその堀方  
とく伏くさる番あるありと方へ此方より或ハ三筋とく

四まじりて掘りくぐるは是より大なる通るるを金堀妙に覺る  
 たり又ハ巾き物をもち候くる方ちんくと云あり兩方よりちんくと  
 互に分ちたり是時味方歸り此方より多くこころを流をあり  
 野間左馬之進物ごうふ田螺と折あきの片隅ふ三ツ又く隅ふ三ツ  
 よやく兩方へはやく一夜置くとき其合戦勝負のまけの方を追ひ  
 うちの方へ進み出ることあり大坂陣の城中秀頼木村大野と称し  
 盆の一方ふ三ツまき一方ふ關東方家康公井伊藤堂と稱して三ツ  
 かきと置いて一夜置くようまきづ關東方の三ツの田より内方の三  
 ツのなみ追ひくるとあり勝負の吉凶を兆すと是よりよきまき  
 とあり武備志と此兆と出り考へり  
 老功の士比曰く古法に相言葉と夜々替りて云く大なる偽り

〇  
 と心得て末々まきのこくやく中々毎夜くくく大坂陣の城  
 内相詞へ山関東方の施と唱へくく一陣まひま右の相言一ツ宛  
 しく濟するまきり是證據より大坂落城のとき城中より女中大ぜい  
 ちんくく施とまき云ふ奇手ハ助く心得て銘々施々と唱へくく  
 たりとあり  
 家康公駿府に於て御伽衆の中より大坂御陣以後去る五月七日若  
 江村しおわく井伊掃部頭家來三人く敵一人と討り三人相  
 討り有之ふ付掃部頭委細吟味相違候へば相討り極り今一人の  
 申口相違ふ付掃部頭不忠被致仕置候へと申付候より申上り  
 候ふその義といくくの仰もあく何も聞かず惣とく物こく余  
 計とくく切つめさるくくまき直りくく就中武辺と

の義の余計の有候が能あり子細の織田信長しき小身の節佐々  
成政と前田利長と兩人と敵一人とて倒し成政利長と向ひその  
方敵を追うき倒さるる義あり首上りと候とて利長我ら  
敵と突倒しとてしり込るる槍合の義の御自分も首とて方  
揚らんと互に辞退仕候所へ柴田權六も馳つき左様と兩人辞  
退の首をも中々我申請すといふ首と上げ我ら高名の證據  
のふり兩人とも來り被申とて三人同道とて信長の前へ出て權  
六申候この兩人より敵と突倒し首ととて取まらざり吟味合  
候所へ参りりり首と某とて参候と申候へ信長公御聞ふき  
れ三人とも大に賞美しとて候とて右二人とも武辺に余計  
あり少くありと仰らと候あり

○  
天正十年十月柴田因幡守退治上杉景勝出馬とて候景勝先手  
本條越前守村上出雲守新津加治等初合戦出らと方上橋とて  
所まで敗軍仕り候景勝旗本まで因幡守のうらり大事におよぶ  
所と上杉義春後入蕃旗本前備とて罷り候景勝の紺地日の丸  
比旗とて三十間と先へあしりて義春手廻の士ども下馬と  
させ槍ととりて膝の上におき芝居を折しき備へと立候と付因幡  
守引返り引とり候とてとて義春備とて以て慕ひ追討仕候とて  
宇佐美民部勝行の曹付の首と二ツまぐ高名とてそのも手負  
て旗本へ來り勘當赦免のふり景勝へ目見を願ひとて父の仇  
の未と思つと目見とやうきとて是の民部父駿河守定行景勝實民部  
父長尾政景とありやとあり  
二ツの首とりと涙とあり罷あり候と上杉家の平林内藏助



井上三郎兵衛落合清右衛門其場ニ有合せよく見く後よりい  
此とれ民部ハ義春手ニ付陣仕候由

紀伊大納言頼宣卿ハ文武の賢將よく其行跡も凡入ニあり大阪  
冬御陣ニ二條の城より大阪表御手槍の御備定あり頼宣卿十三  
歳より給ふ進出なき御先手と我らに仰付らる下さきひ  
と御のぞきあり家康公御感よく城強く先手せりあぐみ候  
もその方仰付らるごとく御機嫌より五月七日大阪落城の  
き御旗本後備づく尾張大納言義直卿と紀伊大納言殿も御着  
陣以前合戦終り大阪落城あり茶臼山より家康公御前ニ頼宣卿  
御出あり今日御先手よく無之や手ニ合不申無念至極  
と頻々御落涙あり松平右衛門大夫正久申候ハ今日御手ニ御

あひあきと御せきと御一代と御のこ  
度も御座ち多くと諫まめゆる頼宣卿聞一召さ右衛門と  
ととと御少く候ひて我ら十三歳の時又あらへまんと申さ  
家康公聞しりまき御涙と御浮へ御感悦いたく常陸殿との言  
ガ金言く候との御称美あきけり石川栄入との言  
高麗都南大門合戦明李如松三十万騎とまきり小早川隆景一  
組二万との合戦あり初り李如松ハ吳惟忠張世爵等十方あり  
山海関より鴨緑江より朝鮮より小西撰津守行長大  
將より大村新八松浦刑部卿法印宗對馬守等二万八千あり  
指籠る平壤城とせりやう小西と追々朝鮮の都より  
きり朝鮮の入馳加り三十万騎あり大友義統ハ峒山城より

ちりし、開逃し、落る小早川隆景、開城府より都より五里と  
 阻くとの間、大河あり其時黒田長政久留米秀包も白川と裏  
 陽あり小西大友もこの城よりまゝ隆景、開城府より踏止り明勢  
 三十万と引受一戦しく相果て踏止りたむひけを惣大将備前中  
 納言秀家卿石田治部少輔三成増田右衛門尉長盛大谷刑部少  
 輔吉隆より飛脚とりつゝ早々都へ引とりたるべく候大河間を阻り  
 難義仕とひちひび此表へ一所より然るべしと申越さきまへど  
 も隆景、我日本より渡海の初めより再び日本帰朝の心あり本  
 朝大半治り國家無支ふるべき壘の上より病死せんとは是の心  
 ありしに幸ひ此陣出来何よりりく満足より隆景年五十八  
 死し惜しむ明の三十万より合切先より火花とありし

合戦し討死と遂んこと老後の思ひ出さるる過を我たむ討ま  
 りとも日本の御弱しもあるを明の三十万と此所より待受  
 ぶるとく少も動ぶたむるよりけきまを大谷刑部少輔只一騎開城府  
 へ來り隆景對面し貴殿の御心底古の名將勇士も此上過  
 ざ但し貴殿二万むりより三十万の圍を受て徒し討死せん  
 こと本意あり速く玉城より惣軍と立備御身惣軍の  
 先手より快く合戦し死と善道し守りたむるも迎も死せん命忠  
 義とむれ全らん早く都へ引入たむるべきむね諫けふ隆景心服  
 し左候つゝ何時より先手の隆景一組申請候間他の望許容  
 有るむとむ刑部被請合ひ玉城へ引とり申づくも大谷とん  
 どんへ我ら請人より立めより申されむ付白川に在り黒田長政へ

此旨申遣し早々関城府へ引入申すこと告遣しけき長政も久  
苗米秀包も小西行長大友義統同道よく文録二年正月十五  
日ふ関城府まで引とり申さまひ付隆景大谷黒田久苗米小  
西大友同道よく川を渡りて王城へ引入候隆景へ右の所存又都  
へ入りて南大門の外碧蹄館に陣とり居らまひ同月廿六日明の  
二十万騎夜の内に河をさす都表へ推詰候其夜の廻り番に  
隆景相備立花左近宗茂も家老十旰傳右衛門五百余りて曉  
打廻口より出りて明の李如松が大军と闘紛るも行き立花  
の勢駈ちて引とらふと明勢追うけしを十旰傳右衛門返  
し合せ五百余散々相戦りて討死する雜兵四五人あり久  
り此旨告る立花左近宗茂則隆景並ふ毛利七郎兵衛元康

久留米秀包高橋筑紫へ告知を隆景則王城へ注進備前中納言  
秀家卿三奉行何事も追々南大門口へ馳来る夜も明けにお  
遙し見ても明の李如松が去去と一里をり備と段々立て只今  
掛らん氣色もその勢淵江の潮に漲来るごとく先手二里余廣  
かり勢子並て立跡も先も旗よく夥しき共中々秀家卿三  
奉行の大敵と野合の合戦いふも都へ引籠り防然と  
ありて立花左近眼といふも太刀をとり大音上げやうの大  
軍に籠城して叶へばとも角をちと野合戦にきり然るに  
申さまひの依之合戦にきり候諸大將先陣とのぞき隆景眼  
に角を立我先陣とて最前よりの約束も他の望あはるるに  
隆景もよく配らし先陣栗屋四郎兵衛大將も村上彈正

野嶋掃部等三千あり二の先ハ井上五郎兵衛大将より佐世石  
見守吉見大藏大輔等三千あり三番ハ隆景旗本一万より備立花  
左近久留米秀包毛利元康六千ハ奇兵より隆景の右北方三町を  
より引退てをより其日の合戦火花をより栗屋井上押立ら  
まひと立花左近横槍を入き大将李如松ハ旗本と突崩せし隆  
景も正面より切られ候付明の二十万惣敗軍より首數三  
万八千余隆景一組ハ討つ候隆景立花手柄申中々疎より  
此とき立花左近ハ曾付の首二ツ直取の高名より鞍の塩手付大  
刀鐔本五六寸のつゝ鞆ハ不入と帯己も馬も朱よりて先手より  
あぐらと参らまけり栗屋四郎兵衛備の前と打過とて具備の  
組頭村上弾正野嶋掃部と呼り立花申けり今日ハ立り

所と推立ちとみとありけり大将栗屋四郎兵衛聞もり立り  
いとも立ち返りとも返りたり我備ハ今日の合戦の花より  
より返答する聞もの栗屋と答より一返立花左近ハ隆景の  
旗本ハ参らまけり立花自身の高名二ツまで鞍付りたるを  
見り隆景取ちり立花見候と答り候て左近聞たり  
毎事仕まをりの返答よりよき自讃の言ありと其場より聞人  
より此とき合戦未始らざる時分黒田長政只一騎歩侍七  
八人より隆景旗本へ見廻り候隆景見て長政ハ幸の所へ御こ  
候栗屋四郎兵衛と先手より申付候物馴れ者どもより心元  
候貴殿先手へ越され毎事御指圖下さ候と申さる長政  
喜悦の色見え畏り候より先手へ越さる頃ハ正月廿六日辰刻より

朝鮮ハ寒國ト云々寒事不斜長政ハ大綿帽子と着シ曹ハ郎等ト持  
せらるる隆景の先手へ出ると綿帽子と脱曹と取く着らる  
又隠あき例の水牛の曹より水牛の角本と薰皮と結び付らる  
又叔曹の緒とあり先手へ出らるる隆景旗本數千の士卒と  
も長政先手へ御候へ今日軍勝ると惣軍勢勇と  
るとあり長政の年を問ふそのと死せ五歳よりそのよとありて如此  
人ハ慥と思つ候へ中々凡人ハあるまじきあり長政常宜  
ハ立物指物ハ海老ハ子ト差するをうらうらハ働馬の立  
行ときぬけて落るりのあり立物一穴とあり受子と穴とあり  
革と結付とあり自分大水牛の立りのも革と結付とあり  
付らるるを其とき見ると人々うらま

○伏見ト云々越前黄門秀康御屋敷ハ於國とりようふれ女を召て  
おきおとせ御見物あり水精の珠數とありうけ舞とあり御覽  
ならせ水精の見苦ト御具足の上御く成され候珊瑚珠比  
珠數と下さむ於國ハ舞を御覽あり御落涙有之御意トを  
天下ト幾万の女あり一人の女と天下ト評せり候ハ此女  
り我ハ天下一人の男トありと叶りむりの女トさ人劣らるるを無念  
なりと仰らるる

○津田長門入道道慶物とあり日根野織部ハ唐冠の曹比立との  
鐘膺耳ト尺五寸脇立あり但右の耳比立物ハ半分より折掛とあり  
やうとあり太刀打ト構とあり

○鳥原落城の砌り本丸の堀下へ着者あり鍔砲綱とあり紀州

浪人平塚勘兵衛重近只一人押へ堀際へ付尾藤金左衛門薄紅の  
大吹貫をきりて掛舟平塚と共に堀下へ付面もやらず堀を乗と  
ろと内より槍長刀をくさんぐく突その内尾藤が口を突込るま  
てよろるるところを又真中を槍を突抜終り討死平塚勘兵衛も尾  
藤と同様のの掛ひを槍を突落さき己に討死と見えけり細  
川隆印の手比乃美庄右衛門掛合堀の内より平塚を突伏せ居る  
敵をつきとけり平塚は助る平塚まゝ起上り堀下へ付その働き比  
類多し但し平塚勘兵衛重近の秀吉公御いとま平塚因幡守吉  
就が甥なり乃美庄右衛門の小早川隆景家老浦兵部太夫宗勝を  
孫なり何と逸物の未孫ゆくと沙汰あり  
大坂落城のとれた細川文蕃頭貞元槍と合まると申上る後家康

公附の槍合むると云々と左やうに節々ありのよしあり此茶臼  
山の北に見えたる勝曼院の山に佐久間不干筒井順慶荒木摂津  
守村重菴りて大坂の門跡建如上人より攻候とれた本の槍合むると  
聞及びより其外上方より槍の聞及びよりそのとき勝曼院の槍の  
昔より言傳ふる杉の槍と聞召しよと仰らる候佐久間備前守  
罷り出上意の通り御坐候同姓不干手より其日の西度槍御坐候  
天正六年五月三日の合戦より御坐候朝の茶臼山の西に見る難  
波の貝殻塚の合戦より不干が與力佐久間久右衛門同葵之助梶  
原彌三郎水野源太郎水岡小三郎六人槍を合候その晩勝曼院  
の山より不干が内志水亦市江原弥介浮見藤介長瀬弥五右衛  
門四本槍合申し長瀬は只今小右衛門と申加賀より有り

申上る家康公聞一召叔々利常ハ能兵と抱持候と御意より長  
 瀬小右衛門ハ黒母衣銀の牛の舌此出く勝曼より槍を合ま  
 る後門跡降参一太坂城衆寄手小屋見物ニ出る長瀬ハ小屋印  
 銀の牛舌の黒母衣を見付日外槍を合する母衣爰ありと小屋  
 前より人多く寄て見くるあり

○

此條書  
 見然と  
 とも大同  
 小異

福島左衛門大夫正則の内伊藤伊右衛門武田勝頼を討奉り士  
 り伊右衛門ハ咄々津田幸庵より甲州滅亡のとき勝頼  
 御父子の御代滝川左近一益先手より國中を尋ねる田野の奥天目  
 山の麓ニ落人の男女五六十人隠れしとありしを押寄たり皆々  
 兵糧より働事不自由何の手も討取然所ハ滝川旗本より  
 早飛脚有之勝頼公信州高遠へ候間早々本より罷歸り

告ぐや人は是もや来りて證據ニ首とりを馬に付帰るる府中へ歸るとん  
 勝頼高遠へ蓄りし風説より沙汰より田野より取し首とりを  
 溝堀へ捨る然る所ニ地下の夫ども其溝の前より皆頭巾とり  
 頭と地ニ付一礼し通るを見て已ら溝堀へ何とくりんぎん  
 ともやと笑ふ百姓ども申ゆらちの堀中ニ屋形勝頼公御父子の御首  
 御坐候数十代の御主と存礼仕候とく皆々驚て其首どりを取  
 上勝頼公御首と云と城介殿御座の門の末んよりけのせ置残の  
 首どりの庭におき城介殿宣ひけと勝頼の首と滝川内にてハ誰と  
 一益ハ甥滝川義太夫か取らるる其聞之も可然と  
 仰らるる滝川義太夫とり奥の口へ召さし勝頼の首と御見せ  
 是ハ汝がと首と御尋義太夫より見く是ハ拙者より候首と

て無之と申則庭へ召き四十むりの首を御見せ候へばその内首一ッ  
義太夫より出し是れ私のより首とてあり出ま則土屋惣藏が首を  
り義太夫と御戻しとて伊藤伊右衛門とあり庭の首とあり御見  
せ此内ニ汝がより首にあまると御ながね伊右衛門則残るを見て申  
上候ハ此内より私より首ハ無之と申上る御座の間へ召勝頼の首と  
御見せ候へば伊右衛門見く私より此首と申城介殿汝がより  
證據ハしつと御尋首の切口ニ私の候馬栗毛粘毛血まより付  
有之候田野より塩手より付道より付如此と申上る御  
覽候實も栗毛の馬の毛付より是時城介殿御意ハ汝ハ冥加ハ叶  
勝頼の首とよりと被仰とあり近年の書見たりを見らば事々  
く働て討死し給ふ様よ書きたるもあまると我其ときハ小平治とく

滝川方ニ居て伊藤伊右衛門とハ傍輩あるまのあつて見とるに左  
様より勝頼ハ鎧櫃ニ腰とつけ太刀を防たよりひぢまへとも飢  
疲なる何の働もより伊右衛門が討奉る板倉周防守重宗宅ニ  
て津田幸菴物よりあり

○塙團右衛門重之蜂須賀阿波守至鎮手へ夜討のとき木村喜左衛  
門畑角太夫牧野湖太田屋右馬介四人槍を合はるこの内田屋右馬  
介持道具長刀形團右衛門ハ長岡監物御宿越前守より向て田屋  
手前槍を合はると申上ると問と云族ありと問御宿か  
曰く槍も橙の柄長刀も橙の柄もを同一とてより長刀ハ槍より短  
けま猶つた働ありと僉義しと濟より木村喜左衛門落城のとき  
討死角太夫ハ稻葉美濃守正則へ抱る牧野湖太ハ本多中務忠刺へ



奉公田屋右馬介ハ五郎左衛門と名々久紀伊大納言頼宣卿へ召  
出さる五郎左衛門後ハ田屋半右衛門と云由

○天正十五年四月一日筑前岩出城熊谷備中守居之と秀吉公一貳責と仰付

らまふ御先手蒲生氏郷前田利家ありその二番備ハ羽柴三河少將秀

康佐々陸奥守水野忠重より山半分御上り此とき落城の間御上り

らと御無用利家氏郷より申し來る秀康御年十四歳あり手は御逢

無之とく無念と思召落涙あり候と佐々成政深く感し

康の御子まき候今日手は御逢ありと御せきふまき候て落涙

候我も様々諫申候より家康公に似申候と誓申ふとき秀

吉公仰る左中よりあり秀康ハ我養子あり武勇の心入ハ皆々

秀吉に似たりやんあり仰らんとし

○

越後浪人大井田監物ハ後越前黃門秀康公に御使番より奉公仕

るその仁の筆記に曰越後國ハ代々上杉家領候處ハ天正十年六月

廿日上杉顯定と家老長尾為景と妻有庄長森原より一戦候顯定

討死し為景則上杉庶流上條の上杉定實と婿となり我子長尾六

郎と定實の養子分り顯定の跡に立上杉と継ぎる為景八男

猿王長尾景康後号謙信その性尋常より替り利根聰明より大膽ありやん為

景氣に違ひ出家せんといふ下越後榎原淨安寺へ遣は後見金津新

兵衛供より下越後へありし米山越より米山ハ上り四里下り四里

より猿王終り八歳より歩侍の背より負より山を上り米山の峠

より草葺堂あり米山寺といふその堂の椽より休て破籠より出り猿王

より參せ供の侍より中食より乳母夫の本條美作守より供より猿王

如き堂の掾廻り遊び居らるる米山の大山より峠の藪師より城府内  
と目の下に見おろす所より猿王の故郷府内の方とありぬ涙を  
て継母の諛言より浪人たること無念あり成人しく本望を遂は此  
筋より一戦より殊に此山の府内を目の下に見おろし能陣場あり  
と宣ふ本庄美作守金津新五衛古とありぬ感涙を流しその言を忘  
まなき人あり悦と限りあり是則天文六年五月猿王八歳のとき  
あり九年の間猿王浄安寺より學問せしむれり出家の心あり  
天文十四年四月長尾為景宇佐美駿河守定行兩旗より越中へ  
より松倉城主唐人兵庫山下左馬介より候と宇佐美駿河守  
三千よりより責落し山下左馬介の外二百余人討果し松倉  
城とのり取り直すとの城に罷ありぬ為景へ八十余より放生津の

城へよりより候らの城より徳大寺大納言實規卿との外公家衆九  
人籠りしむその千細のそのころ京都大乱より諸公家衆より最寄  
よりに國々へ落らるる徳大寺殿へ越中國畠山尾張守尚慶の外孫  
より其便より越中へ御越候四月九日為景の城をせり落し徳大寺  
實規よりめ公家九人上下七百余打果し城とのりより丹へ畠山  
留主居推名神保遊佐郡頭等加州の一揆よりとよりひ後巻より出  
候加州より一向宗一揆より偽く降参仕し申道を作りありて宛を  
より引入しむ為景加州へ押候とき推名神保遊佐等加州へ一揆  
より合候為景人数ありて宛へより大よりたき為景を討死  
惣敗軍より士卒散々より越後へ引退き候宇佐美駿河守定行  
より十一日よりより敗軍を集り堅固に板倉をひき拂ひ越後へ帰

陣より越中勢なりを付んと存候へども、宇佐美々武勇いあそむく  
一人も付ま為景討死なりともその子上杉六郎國を治く別條あり  
此年猿王十六歳より為景討死と聞忌中の追善懇い沙汰し三  
年過へ義兵と上越後を打平せきと工夫をめぐり、宇佐美駿河守  
とくひひみ駿河守も猿王の器量只者よりきと見うひ一味仕り  
天文十六年猿王十八歳元服し長尾平三景虎と名なり同四月九日  
三年忌を弔ひ終り義兵と上り椽尾城より、菴る宇佐美駿河  
守本條美作守馳加りひ兄上杉六郎を聞き、妹婿長尾越前  
守政宗より七千余付て椽尾の城より、候景虎矢余より上り寄  
手を遠見して今宵寄手に引とり、其退口へ突て出  
んと申さるひ宇佐美駿河守中候々長途と寄來り候敵り

空しく引とるべく、我突出ひとるり、異見もる景虎自屋よ  
り寄手と見り、軍兵計り、小荷駄を、長陣の敵より、思  
ふより突て出よ、夜半に切て出る景虎の積りの、政景退  
口へ切て掛り候間、政景勢物惣敗軍ふる候景虎勝りの、追打  
より、國中へ討く出る、宇佐美本條も押り、打て出柳崎の下  
濱に陣と取是より、兄上杉六郎八千より、米山と越て出向ひ候  
景虎一戦とより、組候とき、坂織部後号鬼小嶋度々助吉江織部  
とより、さんく、戦ひ候所へ、宇佐美駿河守庵とより、横入りより  
り本條美作守へ備へる、静々かり候とき、六郎打まけ敗軍  
任米山へり、府内へあがり、申候景虎あつ、真先り追  
進し申さる、米山東坂本より、景虎申さる、何と、

あつたつて候間、休打立、と小家へ入りて移つて申さ  
駿河守と見く、御、候や今敵と追立候  
こゝ竹を破、其勢失、米山を超越、頭城郡  
へ打出府内の城、候早打立んと催候、景虎  
眠、とて高軒、臥申、駿河守様々異見、不聞  
臥、申、故了簡、運の極、と云、景虎へ上杉六  
郎人数、米山峠と三分二、と越、と思、昨分早貝と吹せ景虎  
打立米山へ追上り候如、案六郎へ下り坂、ありむき候所、追付六郎  
人数、破坂、追落、死、の數を知ら、後、宇佐美諸  
人、向、今日景虎米山坂、と追、候と各合  
致、やと尋、合点仕、と云、宇佐美、曰、府内勢、米山へ

逃上り、とて追、若、敵、返、上手、敵、  
進、返、と必、景虎、段、積、真似、登坂、  
敵、登、濟、下、ありむき候、追打、我、若、年、數、十、度  
の、逢、い、の、積、り、景、虎、十、八、歳、の、智、恵、を、軍  
神の化身、と存候と申、景虎、府内城、を、せり、あり、六郎、腹、切  
らせ、其、の、申、候、主、君、の、跡、を、つ、兄、を、候、上、の、國、を  
と、望、み、あり、と、府、内、を、出、て、高、野、山、へ、あり、む、き、申、候、関、の、山  
ま、出、て、候、と、上、杉、家、老、談、合、曰、景、虎、を、越、後、に、重、り、あ、く  
我、儘、と、り、他、人、の、手、へ、越、後、を、取、ら、る、と、追、り、引、と、む、る、景、虎  
居、た、ら、ば、越、後、を、治、む、候、や、上、杉、代、々、の、骨、折、水、あり  
候、と、心、外、あり、と、違、く、異、見、する、景、虎、を、以、來、と、も、

下知をむくまじくと起請文と宿老中りてきまひる歸るべしと云  
其とき上杉家臣二十六人已來り御意次第よりまづるべしと  
起請文を書くとて立歸り春日山の城に入り上杉宣實の上  
條に居ちまふと申合せ越後を治らば長尾越前守政景をひき付上  
州平井の城に管領上杉憲政へ随ひ申さるる年ごろ不義あ  
る者野心多き頭と上るゆゑの大身とも十六人林泉寺を切腹申付  
る然もどもまんの起請文あるゆゑ餘人とも言ふことあるに景虎越  
後とみづからききとる宇佐美駿河守と相談し如此謙信へ上杉を  
継ぎたる兄を殺し子孫とせらるること天道をむくると十八歳に出家  
し不識菴心光謙信と号を二十二歳より上杉憲政の譲りを受  
け上杉政虎と号を永禄三年五月上洛し公方光源院義輝公よ

り一字を拜領し輝虎と改む菊樹澤潟の紋に幕綱代の興文の  
裏書御免より関東管領に成り越後佐渡東上野越中能登飛騨  
加賀まじり手とくひを候と凡人よりいあるべし

常山紀談拾遺卷之二目次

- 一 家康公駿府御花見の事
- 一 朝鮮攻後藤又兵衛物見の事
- 一 加藤家足輕具足と着ざる事
- 一 同家騎馬武者馬上鍔砲の事
- 一 藤堂高虎家中具足の事
- 一 同家士梅原庄右衛門刺物類當の事
- 一 讃州源英公の家士西尾右兵衛の事
- 一 高麗陣の時突甘太郎兵衛南大門一番の事
- 一 同陣清正の家來矢木八右衛門矢疵の事
- 一 大猷院殿日光山繪圖御覽の事

- 一 関ヶ原御一戰御勝利稻次右近高名の事
- 一 上杉浪人門田造酒之丞物語の事
- 一 丹羽五郎左衛門物語の事
- 一 榊原の家人黒田彦左衛門の事
- 一 淺野左衛門家人永田治兵衛働の事
- 一 信玄豆州葦山よりつり山縣同心辻弥兵衛働の事
- 一 三州吉田城迫合信玄廣瀬幸を得る事
- 一 攝州花熊城攻森寺清右衛門八田八左衛門手柄の事
- 一 輝政公武將の重宝を示さる事
- 一 家康公尾州小牧合戦御勝利の事
- 一 家康公同合戦御自讃の事

- 一 福嶋正則関ヶ原出陣日柄の事
- 一 同役吉村又右衛門高名を失ふ事
- 一 同役岐阜落城の事
- 一 同役田中兵部太輔長胤の中間水鍊の事
- 一 同役石田三成浮田秀家少諫を用ひざる事
- 一 同御合戦毛利秀元戦場より東方へ返る事
- 一 同御合戦終り御詮議の事
- 一 同翌十六日江州佐和山へ向つる處大兩より御下知の事
- 一 同枚方面より御旗を立ちし首御實檢の事
- 一 備前少将光政の士泉治部左衛門具足箱評話の事
- 一 滝川左近将監一益極暑馬上一く川と涉り取水と飼事

常山紀談拾遺卷之二

備藩 湯淺 元禎 述

同男 明善 校

天正十八年秀吉卿北條家を退治し行く小田原へ發向の前方家  
 康公も頼て御出陣の前駿府近辺花盛の候に御覽遊より御城  
 中御矢倉の諸方能く候所へ御上りあきまき御老中御供より御菓  
 子御酒等下さきその後御咄の次より各へいらを尋候とんと存多  
 り取紛も候先年長久手一戦のとき晝の合戦より我ら勝より小牧  
 の要害へ取入居候處秀吉ハ二重堀の陣場より一戦の心掛を馳  
 來らま候へども日暮及び小牧城攻へ明日の儀とあり其夜竜  
 泉寺川原より野陣と張居らまし所を夜軍仕より候つ然るに



候その夜仕り候て大閤を必打留申さるる有心り候る左様は  
勝利の疑あり存らるるやと御尋らるる忠勝申上らるる直政康  
政の晝御一戦も逢候て私に小牧の御留主居申一入夜軍  
望しく存候大閤と打とり候處まで心付申さばと申上らるる井  
伊神原も申さる候に竜泉寺表へさ遣し伊賀甲賀の器歸り  
上方勢の夜守り夜合戦の備も無く無法の陣どりと申候に付御  
仕掛候て御勝利と存奉り候秀吉と是非打とり候處まで考  
へ申さるる申上らる候家康公御聞あはれと各左様あらはれ  
と兼く存る處ありその節夜軍より必を勝てんと思ひ  
然しあが太閤と打とり候とゆふこと候とゆふ右の

趣を用ひさるる其子細の秀吉一度天下統一の大功を立んと含  
まれ候然るに長久手十萬の勢味方織田合ても三萬に不及  
戦陣も善あり晝の一戦も十分の仕合あり又夜軍  
も勝て秀吉を打渡候て至極の負とゆふ天下の望あり  
先徳川家を潰さるる所存り候て無益の義ありと存り  
其心入ゆ此度も北條を押さるる夫より出羽奥州まで手入  
天下一統の功立り心掛と相見候と仰らるる何れも感心奉り  
しとあり

○

朝鮮の役も黒田長政後藤又兵衛尉基次を物見つら基次  
中へ馳向ふ處も其道も一つの河ありその河を打てり敵陣は  
近所まで行んとせしが日本の馬の沓川上より流きききを見

早川上の味方の勢北川とそらうしと推量し川辺より直に引返して長政の前より飯り味方の人々北内早川と見えたりと存せりそれゆゑ敵陣近く参り物見仕るるを及び立上りひしを打とせたりと進りし長政大に喜びたまひ後藤基次が武勇の功者あること今も始めざることあがり心早き物見の仕やうらみ出うしりや打立と云なきひけり基次是より前より朝鮮より長政の先手山の端と廻りけるが敵と出合せ戦ひしそらうの意を揚るる後藤聞くと先手のたうひ味方打負しとし長政ききしひ山のたうひと汝爰に在る味方の負しと何と以て知るぞと尋ねらる基次承りし候味方のおき次第に近く開やうし一定負し引と覚へし勝軍が向へ進て開と上るも速くうらみ

との候と申もあくを味方敗軍の兵ども朱より追々きき又兵衛ヶさうさる處神の如く感ぜらる又其後敵の陣へ何所ありしと遙向る馬煙おびし見ゆるは軍の勝負へ何と有るんと宣は基次うらみ敵が打負し引と見候その故にむ敵の武者をうらみ此方へうらみ黒くみえ北の敵の武者をうらみ向の方へうらみ遠きやう白く見ゆるは候遠き色うらみゆる白く近き色の濃きやう黒く是は白く見ゆるは敵の敗北と候と申まその言少しゆらむ敵の勢敗軍にあはひけり晋州の城攻らん別く先登りたるみ勇とあうらみ加藤清正も後藤が武勇を大に感とらむけりそらうり戦功を盡しけり黒田長政筑前入國の後嘉摩郡大隈の城

二あゆみ一万八千石の采地をたまりけ。猶又後の大坂の役その勇  
戦と見つゝ

○加藤の家より足輕具足は不着曹より曹の脇立は長二  
尺より白き練一幅の小あゆみと両より二本立る清正の物語り他家  
より具足を着せ曹は不着或は張抜の笠よりつゝ見えし身より皮  
具足と着くも頭より曹よりつゝざるは細きこゝろがまのより曹と  
着るは具足の不着しゝもこゝろは物より被申しより

○同家より大小身より騎馬は一尺三寸或は一尺五寸の鉄砲を馬  
上より持ち陣前より打放し槍を初るとり清正家中の老人後より  
咄せし馬より火繩何とも難持者よりとり

○藤堂高虎の家中は足輕中間より曹を着金の桃形の曹より一枚銀  
より鳥毛の引廻しを付け胴より古い金の鉄近年替り胴中より三分一金  
より中間は中白筋の羽織より物頭は不残曹の押付より白熊付る白  
き髪を下げし如く胴より下へより見事あるより

○同家土梅原庄右衛門は伊賀の武羅組より刺物と横より斜よりまき  
とありは刺しより右より斜よりまき映は太刀よりまきゆより左より斜  
よりまき此士の三本藤より銀子十七中よりあり此士刺物の柄と  
打柄より請筒待請合足とつゝ丈夫よりまき此意は或は城乗の  
とき石垣屏高く登りつゝ下より石垣の上へより登り庄右  
衛門は刺物と取り引揚げ一番は城よりつゝ以来如此を  
より此士元來池田伊豫守秀雄の家士より又此士頼當の露  
より穴と廣くまき此意は頼當を着る飯と食まき頼當

の透すちとひは落ちつうと指と入さく掃之し宜しとあり又  
氣と散ドかぐとよろしとあり梅原を江戸浅草知樂院叔父より

○

讃州源英公の家士西尾右兵衛浪人のとき有馬の役寺澤家のと  
多んあつる狸々緋の羽織朱熊の頭刺物ときと此士の喉に鉦子  
つらつたつら頼當を掛さるゆへ柔く弱くあつたつら喉の

皮に玉留り死脱るその鉦子後まき留りしと有しとありそ

の鉦子年々下へさがりしとあり右のゆへ一生涯頼當を用ひ

とあり

○

戸川肥後守の父戸川平右衛門家士高麗陣の砌り馬場重助と  
云との南大門の棟へ上り内を見まむ一人もあしとあり味方  
とありと招く同家士実耳太郎兵衛下り上り大門の一番

り実耳太郎兵衛と名のる之に依り重助功を空くを加様のとき  
武功有づれとあり

○

同役清正家來矢水八右衛門といふ者晋州の城攻のとき具足の綿  
嘴又矢を射付らる取り抜けまむ矢柄計抜て根へ止りけまむ  
その場急るゆへ其ま城へのつたきそ此夜陣屋へ帰り矢の

根を抜けまむ肉を喰しめ抜さるゆへ手負と足踏付けく矢

の根を鍊鉄以て漸々抜さるとあり或老功の者云し矢根を當坐

に抜さるゆへ肉を食し不抜物といふ

○

大猷院殿日光山の様子と圖を御覽可被遊と画師参り委し  
く圖まるといふとありと埒あつる北條新藏後安房とつらひさ  
ひ節一覽仕りて御庭の砂と山を仕り御目より候とあり

則安房守と奉行と仰付らる御普請出来の由あり

慶長五庚子年閏原御一戦九月十五日其前日晝前大御所ハ

赤坂へ御着陣被遊候晝時分石田三成方より島左近蒲生備

中大將より杭瀬川をこえ川田誘引をり其口中村一學陣取の際

あり竹田五郎兵衛二千石取 一氏姫三間計の鳥毛の棒のさしをり陣

所の塀をすねて治部が勢へり合三人槍付候を鏖砲みく打倒

候竹田が討まひを見て中村ヶ兵ども柵を踏破り争て掛出し

野一色頼母金の三幣藪内匠推つたり候治部方より水野庄次

郎後号洩香 林半介 治部が 伊前頼母あり五百余進み候

備前勢より明石掃部宇喜田家老 本多對馬守 兩大將は猪兼助

之丞不破内匠等八百餘出候石田ヶ物頭嶋左近蒲生備中伏兵

と木戸一色村の藪に伏置てひき候より中村ヶ勢是てあはれ進

に申さる處と打立射立候と両方こゝろ槍初り候中村ヶ内成合

平左衛門一番槍仕討死仕り候首ハ猪尾甚大夫より中村勢敗

軍仕候家老野一色頼母鳥毛二の團子の馬印とよりて川の東に

かゝ立一足も引まじ候より何れ敗軍見苦し候と匂り候

藪内匠六十不取 中村家老その脇を引て通り候内匠に何と返し不申

やと頼母言さる候内匠より手負候ゆく返し不申候と断

川を西へのり渡り候服部小膳高屋九兵衛より鏖砲のや

比頭ともうく其の兵より候へり押し立ち山崩し申候野一色

頼母ハ金の三幣のさしをり馬とひきより數度たり候と

治部少輔ハ内海北市郎右衛門鏖砲より申し候頼母砲より

馬より落則討死との組子松村清助頼母が死體の綿嚙と  
りて引り退候へども治部人數付立候ゆへ頼母表帶と切刀  
賜差せりて退申候ありて頼母首を富村と申兵よりやみ  
治部方多勢追重りやく中村家人中村新介河毛新八同次郎原田  
梅津天野堀口等二十八人討死仕り候甘利左兵衛ハ川中より立  
合防ちりひ候槍手ニケ所買退きり終候と石田が兵ども追付  
候吉田左太夫返合追拂て甘利とありて中村並の陣へ有馬  
玄蕃頭豊氏より候此合戦を見て有馬が兵どもも數十人柵を  
あえく進申稻次右近鳥毛半月の岡本五郎右衛門真先  
と進て川を渡り治部方の勢中村敗軍と追來候出合頭  
り候稻次右近馬を岸へり上候と金の制札の頭上立物

の兜着て横山監物と名のりり候右近と互に馬上より  
合そのち馬より下立組打るる右近下より申と右近郎等岸  
又左衛門監物が鎧の綿嚙りて引り候へ右近上より候  
監物若黨りけ付右近の兜の鏝より付引仰候と右近より  
きんと頭とる處へ右近が若黨りけ付監物郎等と切り候へ  
右近の兜を放り抜合防合申候ありて所へ堀尾信濃守忠氏の  
母衣の衆一人りけきり敵味方とも辨へ右近が若黨と味方討  
りり首を取引返り候その内は右近ハ監物り首をとり立上り  
監物若黨をも切るる首をとり二ツまで高名り若黨が首を  
鞍の塩手り付監物首を奪付て手り提げ馬を静々と歩せ中  
村が陣中を通りけり見る人譽ぬものあり其場過て備前秀

家の家老明石掃部三百余り池尻り福田繩手へ廻りゆり來  
う候中村一学人数能まいを矢野助之進金の圍の只一騎を取  
て返り大勢の敵へ立向候林文太夫赤母衣金の桔梗の笠とり合せ傍輩  
の梅田大藏が深手負て退り糸ひを助け退申候助之進此見付て  
梅田と助退候んよう此大勢の敵を防候へと言葉をけらせ  
文太夫へ梅田をまり馬を声をけりのり出し助の進も馬を踏み  
立二騎連て掛入と明石掃部蒲生備中ケ人数前申候兩人勝り  
乗りて追打候赤坂御本陣より大御所御遠見ありとり大事の合戦  
と明日より無益の軍を損り申候早々引揚げ連  
て戻り候へとり御腹立あり渡辺忠右衛門重綱金手捕  
と遣り候へとり敵味方をわりとり候大御所殊の外御

怒り井伊直政兵部少輔兼金の堀取の馬印本多内記忠朝雲守後出と  
御さ遣り候直政忠朝へ中村の陣へ馳入早引上  
申べき旨申渡候と矢野助之進林文太夫敵と追立々戦申候  
直政の付何と仕候早々引上候と下知り候  
助之進文太夫より返りこの所を此兩人御仕せ候へ兵部殿内  
記殿より有馬玄蕃手へ御下知候と申し捨切り遂に大垣方  
ときに崩り夫より敵味方入交り合候らとり治部少輔が兵  
水野庄次郎の皮比羽織銀の大釘の立物の鳴り來り中  
村母衣の梅田大藏が手負て引兼候と首ととり大垣へのり  
り三成隅矢倉に居候下へ参り水野庄次郎より御坐候高名  
仕候問御勘當御免下さとり呼り候治部少輔の心得と

高名も見届候間先手と頼候早々参引取くまひへと申候付又庄  
次郎へ先手へ参候この有馬玄蕃頭も田中兵部も中村一学を助  
て多勢くく候ゆ秀家内稻葉助之丞金切き治部ちぶが使番  
林半助乗下り殿仕候明石掃部も堤と傳つた兼上馬かみうま輪わをく  
殿仕候一旦村の藪の下した中村勢有馬勢ひくと付處ところく牧野傳  
藏ざうが兵ども又備前勢少々あま留とどり候丹羽道監みちのりと石黒藤兵衛立  
くたり見事候候くても暮くり井伊直政幣はたけととりて中村有  
馬うまが勢と引上て帰かへり候

一説中村ヶ軍士等大垣勢おほい掛留かきとどり未堤よもの下したありけり大  
御所本多中務大輔忠勝ただかつを召より其方急いそぎ馳越せりこ中村ヶ手の者を  
引ひあぐと仰おほり忠勝ただかつ頼たのりて御前ごまへと退ひき騎兵きへいと足輕あしかろと相あい

くく珠たま瀬川せがわより中村ヶ兵士と引ひき忠勝ただかつの後のち殿どのへ退ひきけり  
秀家三成両家の兵士猶なほくひ留とどり勇ゆうけいも本多ほんたが線引せんりの  
列伍りやくご乱らん故ゆゑに付つきもえをを代しろ扣ひけり秀家ひでの軍  
士し稻葉助之丞いなばすけのすけ金切かねきり枝助えすけ三成家人林半助はやしはんすけ白しろも  
先達さきだちて進すすみ來きり忠勝ただかつヶ備もとに近付ちかり二人ともふたりともに輪わとく大御  
所ところあり御覽ごらんなり武者むしゃが見事けんじなりと仰おほりとや右の  
品實録しんじやくありとく借かり見みりと義ぎ記きをを改かりと井伊  
氏うぢのの殿どの相違あひだちなりや猶なほかと可書改かきかへり  
此こに大御所おほいへ赤坂岡山あかざかおかやまの本陣ほんじんより御見物ごけんぶつあり井伊直政ひでまさ人数  
の拳こぶし様さま中々足手あしでをつつく様さま下知したちり候ま見物けんぶつありと  
人々ひと申まり秀長ひでなが三成人數さんじゅうにんずも漫々まんまんたる引大垣城おほいへ引入いれる勢



の内、白ちるひさしと武者一騎のり下り見むとに殿仕候大御所  
白しるひ見こと候と度々仰せしむ此とに中村の方究竟此  
兵士三十六騎討死殊一學家老野一色頼母討死仕ら味方へ討  
と申候首ハ有馬玄蕃頭内稻次右近が討取候横山監物主従  
二人の首計あり此とき右近ハ御本陣へ參候と大御所御覽せられ  
鳥毛の半月ハ先刻この陣下を通り敵に向候き高名仕候やと申  
者と御尋あり有馬法印御傍に居らると同氏玄蕃家人と申上る  
則首帳に付申稻次申候ハ我より先一ツ持來り候仁有候や  
と云筆者申候ハ中々堀尾信州の母衣のとの首一ツ持來りて帳に  
付候とゆふ稻次承り夫ハ我家人と味方討し仕候との御帳をけり  
候ひく下さると申則大御所御聞るると何支と申やと御たがひ被

成候筆者承り右近が申候通りと申上候ハ筒様の打交り軍一  
ハ味方討しくも高名と申候例もあま首帳消申間敷と仰ら  
候らるとに堀尾信州方へ聞え母衣十走の兵ども敵味方見分を  
ろたりの母衣仲間と不罷成候そま御置可有候ハ繩を  
上候と訴訟仕り候堀尾帶刀吉晴き尤ハ候とくらのとのハ繩を  
ハ召し上仲間と申候と加増をあり弓世人預り候と有馬玄蕃  
ハ稻次右近高名と感本地五百石の上六千石加増を遣一家老  
一致き候先年肥前島原と八十五歳と討死仕  
上杉浪人門田造酒之丞ハ浅野米女正彈正次男左京大夫弟正則一奉公ら  
の門田ヶものぐら日本條越前守重長ハ越後本條城主大剛一の  
大将上杉とて一二と論する程の武勇あり永禄十一年本條越



へ参らるる白石城主とて五万石下され候福嶋城の本條重長築  
 川の城ハ須田大炊多關ヶ原御陣あり関ヶ原御軍のとき甘糟備  
 後會津よりあつて罷有候とて甥の登坂式部逆身一政宗へ白  
 石城とて候式部も政宗へ行夫より景勝無興一て甘糟備後  
 守と遠のけ言もかけば備後守も日陰者の様より罷あり小家康  
 公聞一召一及ひする大剛名譽の兵ある故一御望一思一召一畠  
 山下総守義直一仰遣はる景勝目見一惡由早々立退御旗本へ  
 まのり候へ二万石にて召出さる一と仰遣はされ京より下総守方  
 へ備後守と呼て上意の趣と申さる本多上野介正純書状ま  
 してをひて備後守頭と地へ付景勝目見惡く拙者の不調法にて  
 少一も恨御坐あり候とて何様一致さるもとも譜代の主一候間

御免下さるるへ上意の有うて存一奉り候旨波と流一申候との  
 段達上聞候つとの忠義信の所より猶よした兵ありと仰せ候  
 畠山一逢候と何とて聞え景勝より不與一我より  
 畠山方へ行こと言語同断とてりり甘糟とて申さ候備  
 後守死去子供跡式申付らる津輕へ浪人仕あり右兩人此  
 外一太剛のその主大將分のと此多一十坂對馬守あり上杉  
 四家老の一ツあり見とある士より何方へ大吏の使一越候とて  
 一々々埒明べき仁体あり分別者あり岩井備中守一謙信小姓立  
 一見いとある男武辺度々りり分別辨舌兼備了名高き兵より  
 殊一茶湯者あり安田上野介一ハ小男あり手痕あるゆゑ少一足と  
 引眼より光ありて何者か見及ても剛の者とりぬ人あり中々

かく氣高き士あり杉原常陸の武辺なきありて平人のついでを分別  
了簡大い軍功數度あり糸くそものさしものなさを直江山城守  
も大男くく百人うもまゝなるゆゑなほく學問詩歌の達者才  
智武道兼する兵あり恐く天下の御仕置より候ともあらむ  
まじき仁体あり鳴津下々齋是の戦功武功肩と並ぶ人あり其  
外能士多くありしと今へもやのさへ死り果て二代三代り  
及とうと門田とのかうあり

○丹羽五郎左衛門長重の咄く鴨野口く我等も仕寄を付る景  
勝出て我らも仕寄を付申べし先是ある流し橋を丈夫懸てよ  
り申付引込直江をとりぬき入ると思ふ氣色よく橋もくけ  
を景勝まゝ出何とく橋もくけぬと被申西條治部申へ只今まで

り橋のくけ申べし即脱より申候景勝見く本の仕寄場をばさ  
し置胸に土俵を置き鉄砲をくけ貝次第に土俵をもち持参し下知せ  
り大坂く始へ用心とけりかゝの体を見て上杉の軍のまゝをもち  
ぬくもくくへあはれく引入景勝衆も主の下知を受け顔に景  
勝へ敵の油断を見まき貝を吹立と即時に本仕寄場へ土俵をひ  
きと持寄仕寄を即脱し付る前の土俵置する仕寄道より明日大  
阪方仕寄防出是と見て肝を消し奥とさきけり

○ 柳原の家人黒田彦左衛門より兵あり大坂落城のとき五月七日赤  
母衣くけ敵と突つせのりくり首をとんとつまく候を傍輩  
の三枝勘兵衛のり付く彦左衛門の首へ相討ぐ云彦左衛門へ  
そを聞て首をも不取打捨てその身へ槍提先へゆく三枝もそを

見く又言葉とくけ彦左衛門相討そくと呼ばるるも弥きうぬり  
先へ通りまゝ敵と突倒し能首と初捨さるる三枝打とる儲遠  
州の病死の館林へ久世三四郎坂部三十郎と違さる今度手柄高  
名の御吟味あり三枝勘兵衛申候へ我ら取候首へ黒田彦左衛門槍  
付さる首と候相討むと呼う候ふもそのまゝ捨て通りいゆひ  
と相打そと呼候ども聞付む先へまゝ候ゆあとうく此首とくういと  
いふ三四郎三十郎の黒田といひ是と聞ハ中々不覚と答三枝と  
黒田に向つてその方敵と槍付候を見て相討と言葉とくくその  
方へ其突伏さる敵とまゝ先へ通さる付跡と相討むと四五度呼  
う候ども見うくもさば参候ふ付是非多く彼敵の首とくういと  
いふ彦左衛門へ猶覚え候むと坐と立さるぬらの眼両御所様上

聞て達し御感浅くうらむ

○

浅野左衛門家人永田治兵衛の病者さくけさるること自由あり  
若者とも内々の病者さくけ何の役も立さるべとさる永田  
己と傳聞人足は達者次第待ハ剛の者の役も立無病又病者  
さくけさるべといふ榎井さくけ大坂方淡輪六郎衛を討とる其首と  
ゆき付さくけ持参し病者さくけ息災人と日来嘲さる人をさく  
ひくさくけ淡輪六郎兵衛墓石塔榎井さくけ甥の淡輪新兵  
衛立さると聞其眼の一番の吟味ハ榎井一戦のと記亀田大隅守惣手  
の殿へあさるのく上田主水の先へのく榎井の町中のさくけ  
隠居る亀田とさくけ過さくけ家より出て町中さくけ大阪  
せりく槍とありさくけ一番槍あり亀田ハ河原の敵と追ひさくけ町へ

け入槍とあつたまゝと浅野右近土井大炊頭一咄一候と聞ふ人  
物々あり

○信玄豆洲葦山へとうつめ焼働のとき葦山城の押へ山縣三郎兵衛  
をゆいおきなまゝに城中より備を出し追合ありその節山縣同心  
辻弥兵衛槍下の高名しく膝の口とのぶら射らと其矢と不抜  
てとうなる首をもち來り大将の山縣敵に畏り居る山縣大い噴  
て味方の引とさる前戻りまゝとて場と追立たり

○三州吉田の城せり合ふ山縣内見科平石へいりまゝ者と討廣瀬と  
人の討ぎまゝも身衆へ付けまゝ故に信玄別しく廣瀬を召御喉輪  
とまゝて當坐の引出ものゝなまらけり

○池田勝入公攝州花熊城を攻らるるとき森寺清右衛門 池田刑部  
先祖あり

八田八三右衛門 豊後守多と城の屏除に付て居る城兵突て出て  
寄手崩まゆらん八田氏跡のうら伏て敵引入んとまゝと付んと思  
ひ居るに先の方森寺氏城屏の腕木より付らまゝて槍を持  
居る古老の兵のまゝなるゆゑ能くまゝと思ひ森寺氏より  
五六間もあゝの方より腕木より居る城兵敵と追ひ  
まゝに城へ入るとき腕木より不知しく引入るを森寺氏腕木  
より飛下て槍と取く敵と追ひ槍とあせ一番の功とあり八田  
氏も同く飛下り槍取く敵と追ひまゝに二番の功とあり

○輝政公武將の重宝とよまきへ領分の百姓と譜代の士と鷄と三品  
まゝとそれと如何とゆゑ百姓の田畑を作り我上下の諸卒とやいな

ふ是より一つの重宝あり譜代の士はよく氣に不應し扶持と放ま  
しりて敵國より彼者を實に扶持放さずと思し問も入  
ると思ふ疑ふも多し敵國に逗留するに似たり終るに  
國へ歸りて我兵とあるも二ツの宝あり又目に見ゆる相圖耳  
聞ゆる相圖敵の耳目よりうるとゆきゆき敵國よりうると  
一鶏鳴へ誰もその相圖を知らざるゆき即ち敵國の鶏鳴より  
一番鳥より人衆を起し二番鳥より食し三番鳥より打立ると  
と相圖を究て敵もその相圖をあるざるの徳あり三ツの重宝あり  
是より三の重宝と立しと宣ふあり  
尾州小牧合戦家康公御勝利己に首實檢甲州の先方廣瀬郷左衛門が  
云く我古主武田信玄大合戦勝利を得くは必を引上げよき場或は

身方の城へとり入る二の目と討きざりて第一とまると言上同國の  
士三科傳右衛門が曰く遠くを去る六月江北越前の境椿江城  
より佐久間盛政が中川清秀父子を討くその威を振くとりて  
引取遅くし柳瀬の敗軍今より言上依之御人數小牧山  
へ雲の如く上たふあり

○小牧山御本陣に御旗御馬がたり或は張立或は隠したまふ上方は  
勢旗の心づきを味方の人氣を敵に見せしめ長久手表へ悉く敵  
と釣出し敵に先手を捨てし旗本を討破る御備あり此合戦は公後々  
まく御自讃あり

○福嶋正則関原の役趣のとき出陣の日往亡日あり或人諫め曰く  
占之趣出て再無帰事候へ他の日定めらるし正則聞て

實吉日より我此度の戦功名第一と被言働と遂大國に被封て行  
運盡るに討死と思極うと云ふ何ぞ再びよの地へ歸らんや日を  
昏るるを有るに似て出陣せられし果しく働功拔群なるが故に  
勢備西州五十二万石に被封たり

同役正則尾越の渡を越て秀信の兵を追ふに城兵一騎後を引行  
所と正則の士吉村亦右衛門馬を馳て追之已に追付んとせしか  
幅二尺をりの溝のうらうらう吉村が馬曲あり此所より狂  
勿尻込し不進長尾平右衛門へ遙より馳來りけりけり溝  
を濯ぐの武者を討たり戦場を曲馬へ專撰むべきらと  
らんと吉村心を用ると疎く高名を失り

同役岐阜落城の時黒田肥前守長政藤堂和泉守高虎田中兵部

大輔長胤生駒雅樂頭吉正幸山伊賀守等の城早く落ち故手  
は不都合と憤りけり大垣の城を責んとて進み行ふと石田  
三成浮田秀家嶋津義弘小西行长その勢二万なり岐阜の落城せ  
しと不聞後援のしめ軍を發を呂久郷戸の辺より行合ふ田中  
先登し三成が兵を討三成が先鋒敗し義弘の時三成へ軍  
使を遣し先陣少敗したる後陣猶戦よりあり敵の勝を貪  
て部曲乱る此虚日のうて横きん突バ大判ちん疾く兵と進め  
しと三成不聴し岐阜已に陥り候へば是と責むる勢  
續き可來今少し利有とも畢竟の勝なりを巢穴とてしと變を  
見候くんしと軍をくるとの西黨大に敗し郷戸赤坂迄二里  
の間追討し逢者おびし義弘の言に従く横つと東黨に敗



走必然とん惜き圖と失り

○ 同役長胤郷戸と渡らんとき中間の中水練とよき者あり  
是としく瀬踏せむ大雨の後水増しく浅瀬を志し諸人渡り兼る  
所への中間川へ飛入り或は浮或は沈て甚深しと見えは帰る浅  
く候しり長胤先は汝もさうしり体は深しり体も今浅しと云  
へ如何と被尋ひまぶる者答く浅き体と見候し他の備より先と  
争ひ渡り候んとて深き体と仕候しり長胤則浅き通りを渡り  
先登の功ありとの中間に此功よりて郷戸三郎左衛門と号し士の  
列に入らば後細川家より病死せり  
○ 同役源君赤坂は御着陣有洋田秀家勢州より大垣の城より三  
成に對し今日東國より上りし諸軍の陣營を見り營法不嚴

軍令不整浅間あり体ありし敗形は果し今夜軍を發し營を敗ら  
ば必き利ありんこと彼を銳氣と奪ひ味方の勇を益の謀るんとす  
めけきとも三成不果しと止め能き圖とを利と見て不取數度  
あり

○ 同役十五日の未明赤坂の惣勢関ヶ原へ打出辰上刺内府公野上村  
西海道の南挑栗原と云山の御旗を立らる御旗本組段々の御備  
関ヶ原町東の端より十二町程あり御先は則福嶋左衛門大夫同刑部  
少輔京極待從藤堂佐渡守有馬玄蕃頭山内對馬守田中兵部少輔  
二番備黒田甲斐守竹中丹後守三番備下野守忠吉郷井伊兵部少  
輔本多中務大輔酒井左衛門公御馬先は御小姓組段々の備へ五の  
字の御使番五色の御母衣組御馬より金銀の半月切き金の扇

子ハ大久保彦左衛門御馬先ニ進リ今日未明ニ小兩降霧ニ  
 物色見えケリ漸己ノ刻初ニ天明ニ御旗本より武者二騎の  
 出ニ敵ニ備ノ虚實考ヘリ戻ルニ則曾部江法齋森勘解  
 由異本澤井左衛門奥平藤兵筑前中納言陣松尾山と内府公  
 御旗本との間三十町ニ足ル石田三成陣と公の御旗本との間三十  
 五町ニ敵方東軍の旗先と見ケケル則藤小川と打ニ小関村の西  
 巽ニ向ケ段々ニ備ヘリ備前中納言大谷刑部少輔平塚因幡守戸田  
 武藏守同内記等ハ山中峠ニ人数と立ニ谷川と打ニ関ヶ  
 原の北の方へ押出ニ西の山と後ニ足輕とケ鉄砲と打立矢と  
 発スニ手ニあリ東方福島左衛門大夫同刑部少輔藤堂佐渡守黒  
 田甲斐守京極侍従北の山ニ押下ニ静ニ合戦敵身方ハ

取取むむびび地地煙煙と立攻立攻ニニ宇喜田秀家無二の西方太  
 閤閤の御御ときときより五大老五大老のそそ比比一人今日今日の長將長將るる六八千六八千の人数人数五千  
 先手先手三千旗本三千旗本ニ福嶋先手福嶋先手へ平平ケリケリニ面面ととニ突立追  
 々々ニ二二の手手より秀家再拜秀家再拜とと正則正則とと討討とと天下天下の面目面目ニ  
 備備とと息息ととつつを突突とと正則正則下下リ立芝居立芝居ニニ秀家千秀家千の備備を  
 持持久久せせりりのの敵敵ハ前後前後一ツ一ツニ成成とと勝勝ニ圖圖とと正則正則ニ  
 ありありと下知下知志志たたまま福嶋勢守福嶋勢守とと見る内内ニ惣返惣返ととア  
 勇勇々々る宇喜田勢宇喜田勢と旗本旗本とと追追ひひくくををとと秀家千秀家千の備備を  
 りりととニの味方味方ニ用用ひひたまたま勝軍勝軍ととワワリリこの戦戦ハ半半ニ  
 名名嶋秀秋嶋秀秋とと大谷刑部備大谷刑部備へへつつききる則則ち吉隆馬上吉隆馬上ニ自害  
 を毛利秀元戰場毛利秀元戰場とと東方東方へ返返此色此色とと見て諸手諸手の敵崩色付敵崩色付と云

○ 同役、家康公御合戦をり御詮議石田ヶ陣場小池村柵より東  
よく討とる首へ高名その品軽重あり柵を西へのりこきく捕首へ追  
首あり南宮山の敵へ追手の敗北を聞てのこき退散あり

○ 同役翌十六日江州佐和山へ向つるべしと五字の衆諸手仰渡さる處  
し申の下刻より大雨のとき山中村御本陣大雨に付惣軍小屋が  
支宅の火を焼くことを得て御旗本より惣勢へ生米喰べし少の内  
水と米と浸して喰べしとあり不破関川の洪水に敵味方の死骸流  
ることを夥し

○ 同役家康公牧方表に御旗と立られ今度討より来る敵の首御實檢  
あり公甲冑と召拔身の御長刀と持せしき牧方前野御林初に御

腰よりけし御張肘より大阪の方に向つる御前より御旗七本金の  
扇子の御馬おろし御鑊炮百丁火をく火付御弓百張矢といふ御  
槍百本拔身御右より井伊本多大久保酒井榊原御譜代の諸將伺  
公少し上りし秀忠公初奉り御一門方御左に池田三左衛門福  
嶋左衛門大夫その外今度忠節の大小名毛種をしき張肘より伺公  
を外様の大名へ馬おろし立し所より具足櫃を引付々々伺公を扱諸の首  
曲物に入上を結し包しその絹より取り曲物の蓋を明て首と出  
さるその次に桶に入し首六ツ七ツあり其外誰々の手へ討とる鼻  
とくき並より然るときは公さく首實檢ありしきやと池田福島兩將  
へ上意御受し御殿宜く御座るをせらる候旨申上る其時立上  
りたまひ長刀と御杖に御つきし御張肘より左の御脇と御眼を

りよく土覽その時前後左右大小名一同頭と地付たまる各頭  
と上て張肘よく伺公御足拍子と左より御うきさく右と御うき又  
左より御踏納あきせらる鯨波と曳々と長く御あつ諸軍一同  
とわと声と上げ奉るはく御長刀と御脇うきと受取奉り秀忠  
公へ渡進上仕る秀忠公謹ぐ御頂戴うきとめち御長刀持入り  
御渡りはく御蓋あつととと

備前少将光政の士上泉治部左衛門義郷ハ上泉主水ウ切て大坂  
兩度の役も武功あり老年の頃池田信濃守政言光政の二子也上泉具  
足箱と利方よと制法ありや聞置て家中の士も言聞せんと尋らん  
けまの上泉答て笑も仕擔も仕候々有來るよろひ笠と用ん  
り様よくも害なく候閑が原大坂兩度の役天下諸軍馳集り候

種々の品有て是ぞ利有と申こゝ承る候重き害ありく輕き利あり  
り候へともこゝに軍行の定法有て左より遠路を押こともゆき  
必憂とまると不足筈ハ山林繁茂の地と利ありと申候とも具足箱  
き、持行も不自由なる地ハ大人數を押入て何の益有べきや只有  
まらせく用よと被令然べく覺え候とも

滝川左近将監一益武藏野合戦に擊負て退口極暑の頃あま馬  
甚疲く遍身汗まびとまり川を乘渡るとき水を飼とのあり水を不飼  
とのあり水を飼りの馬ハ十町をりゆく皆行休まるとも不飼りの  
馬ハ別條ありととあり